明治廿四年十一月[illegible]日發行

女鑑

第五號

東京國光社

女鑑第五號目次

引田部赤猪子



女鑑 第五號

女鑑

女子教育の基礎

嵐山吉野の櫻、これを彼の荊棘茂れる西洋の園に植ゑなば如何あらむ。忽にその美しき態を變ふるなるべし。高砂住吉の松、これを彼の八重波しげき漢土の濱に移しなば如何あらむ。忽にその高き姿を失ふなるへし。他の故なし。其の風土氣候を異にすればなり。

女子教育の道も亦然り。我が國の女子は、所柄にやあらむ。其の性質至りて純潔にして、風來の優美高尚なるゝ、嵐山吉野の花にも比へつべく、節操の貞淑堅固なるは、高砂住吉の松にも喩へつべし。さるに、之を教育すとて、彼の自

由權利に偏せる西洋の學園に遊ばしめ、虛禮潤飾を事とせる漢土の敎庭に移しなば、其の固有の淑德美風は、忽に跡を隱すに至るべし。これ亦他の故なし。其の國体人情を異にすればなり。

風土氣候の差は、能く物をして其の形体を變せしめ、國体人情の異は、能く人をして其の性質を變ぜしむること斯の如し。故に嵐山吉野の櫻、高砂住吉の松をして、永く其の本体を保たしめむとせば、根株を動かし地盤を換ふることなくして、之に適へる自然の培養を行はざるべからず。我が國の女子をして、久しく其の本性を失はしめざらむとせば、導化の基礎を此に取り、心を自國に繫屬せしめて、之に適へる自然の敎育を施さゞるべからず。

抑我が國体の尊嚴なるは、宇內萬國に卓絕して其の比類を見ざる所なり。而し

て此の國体の、開闢以來數千年の間欠くる所なかりし所以の者は、主と天祖の御遺訓と、歴代の御聖德とに因れるは固よりの事なれど、亦人情の至りて敦厚にして、臣民の常に忠勇義烈なりしに因らざるべからず。されば、この尊嚴なる國体の間に孕まれ、この忠義なる臣民の母と生れ出でけむ女等が、其性質の純潔なりしは言ふ迄もなく、時に臨み事に當りて表はれたりし德行嘉言は、載せて史籍の上に在り、今に丹青を照せり。是實に、我が國民が、國体をして尊嚴ならしめたりし忠勇義烈の念の湧出したる源泉なりしなり。此ぞ、後來日本國民の母たるべき日本女子を教育する第一の基礎には在るなる。

さるにても、今の世の教育家と稱する者、多くは此を捨てゝ彼をのみ取る、抑何の心ぞや。嵐山吉野の櫻、高砂住吉の松も、之を異域に移し植ゑなば、或は

其の生を保ち得べきも、之已に嵐山吉野の花に非るなり。高砂住吉の松に非るなり。亦焉ぞ我が國人の稱賛を得て、其の詩嚢に入るを得む。我が國の女子、之に外邦の教育を施さば、たとへ智を開き能を進め得べきも、之亦已に日本の女子には非るなり。亦焉ぞ忠義なるべき後來國民の母たることを得む。櫻なく松なくば、吉野住吉の名は朽ちなむ。忠勇義烈なる臣民なくば、日本の國体は茲に破れむ。吾人は、我が國体の永遠に宇内に卓絶せむことを望む。苟も吾人と感を同じくする者は、女子教育の基礎、偏に之を我に取らざるべからず。

論説

婦人の美

菅喜田和三郎

その容貌花の如く、月の如く、三千の寵愛を一身に集めて、あたりを拂ふ楊貴妃の如くにして、始めて婦人の美といふことを得べきか、七寶の瓔珞光りを放ち、綺羅盛粧人の目を眩し、雲鬢輕く亂れ、綾袖高く揚りて、始めて婦人の美と云ふことを得べきか、湯沐すゝぎ畢りて、風姿婀娜、秋波斜に流れて、一笑千人を惱殺せしむるが如きものにして、始めて婦人の美といふことを得べきか、此等のものは、その美は美たることに相違あるまじけれども、未だ婦人の本色として、その美を稱すべきものにあらず、けだし容貌と裝飾とは、只その外觀に止りて、之れを以て婦人の美を左右すること能はざるものなり、故にその容貌花月の如きも、面上の一皮をはぎさらば、その美たる所以のもの、忽去りて痕を留めず、裝飾善美を盡すも、錦繡を捨てゝ、繿縷に就かしめば、そ

の美たる所以のもの、忽去りて人嘔吐を催す、是れ婦人の美は、その容貟と裝飾とに非ざる證據なり、

果して然らば、婦人の美とは何を稱するか、曰はく之れを去らば、婦人の性質を失ひ、之れを除かば、婦人の地位を離るゝものを、悉く所有して、全からしむる者を指して、始めて婦人の美といふことを得べきなり、之れを去らば、婦人の性質を失ひ、之れを除かば、婦人の地位を離るゝものとは何をかいふ、則ち婦人の特性として、除くべからざるものを云ふ也、婦人の特性として、除くべからざるものとは、何ぞ、婦人の天性として、備ふる所の德をいふなり、之れを分ちて、貞實の操と、柔和謙恕の德との二となす、之の二を備へて、今日の性行を完からしむるもの、之れを稱して、婦人の美といふ、而して容貌と裝飾と

には關はらざるなり、
されば容皃は如何に美なるも、裝飾はいかに美なるも、この貞操柔和の溫德を欠かば、決して婦人とはいふべからず、況んやその美と云ふことに於てをや、古へより美人と稱するものを見るに、希臘絶代の美人と稱する妃蓮は、其の身斯破流多王の皇妃にありながら、土魯韋侯巴禮斯と親みて、終に十二年の戰端を開き、埃及王の女王久麗王葩都羅は、其の容皃の美なるが爲に、終に自殺の厄に陷る、其の他之れを東西の史籍に徵するに、即天武后、楊貴妃の如き、その色の美なるが爲に、國を蠹し民を傷ふ何幾ぞや、我が邦に於ても、保元平治の亂は、美福門院の與りて力ある所なり、嗚呼古來美人と稱する者の結果斯の如し、如何ぞ之れを以て眞の美人の標準となすべき、

近頃世に稱す、容皃と裝飾と、其の美を兼ね、社會の人情に疎からずして、交際に熟練し、傍ら文學風流の道にも通して、技藝歌舞を語るべきもの、之れを稱して美人と謂ふべきなりと、是れ亦婦人の美たることには相違あるまじけれども、こは婦人の美の、第二義第三義たるべきものにして、直に之れを許して、美人の稱を下すべからざるなり、蓋し當今の世、社會の人情に疎からずして、交際に熟練せるもの少からず、然れども此等のものは、却て世に醜聞を流すは何ぞや、文學風流の道に通じて、技藝歌舞を語るべきもの、亦少からざらん、然れども此等のもの、立ちて婦人の鑑となるべきもののなきは何ぞや、是れ皆貞操柔和の本性を失ひて、徒らに他に趨するが爲なり、貞操柔和の徳は、先にもいへるが如く、之を除かば婦人の性質地位を失ふ者なれば、婦人たらんと欲

する者は、第一にこの徳性を涵養することに勤めざるべからず、これを勸めずして、徒らに第二義三義に趨す、是當今の弊にして、婦人をして婦人たらざらしむるものなり、

嗚呼世の孃子等よ、容貌と裝飾とは、婦人たるに於て何かあらん、交際の道、文學風流の道、技藝歌舞の道も、第一義のものを措てなすときは、却て婦道に害あり、故に若し孃子にして、婦人の美をなさんと思はゞ、美人かゞみに載せられんことを期せずして、却りて省かれんことを心掛けよ、

婦女職守の範圍

三橋要也

世間一種の女學者流あり。其の言に曰はく、天の兩性を生ずる、其の間始より

差別品等有るにあらず。同一なる体格を有たしめ、同一なる心性を具へしめ、以つて平等均一に社會内外の事に從はしむ。故に苟も男子の爲し得べき事業は、女子も亦必之を爲し得べし。彼哲學を修めて、宇宙万象の幽理を闡明せば、我亦之を爲さむ。彼物理を學びて、天下萬類の原則を發見せば、我亦之を爲さむ。彼法律を修めて、判官となり、代言人とならば、我政治を學びて、大臣となり、代議士とならむ。彼耒耜を執りて農事に從はゞ、我劒銃を提げて軍陣に列し、彼筋力の業務に服せば、我亦勞働の苦役を甘せむ。凡社會萬般の事業、其の智力を要する者と、腕力を要する者とに論なく、男子の爲し得る所の者は、即亦女子の爲し得る所なり。斯の如くにして、始めて天賦の權利自由を全くし、以つて文明の眞域に達することを得べしと。

嗚呼これ何等の妄言ぞや。是造化配合の妙巧を覺らざる者なり。社會分業の原則を知らざる者なり。何ぞ其の見解の皮相に趨りて、其の論礎の薄弱なる。想ふに天下具眼の淑女等は、かゝる言を信じ給ふこと、萬々之無かるべし。吾人も亦之に對して辨駁を加ふるは、甚大人氣無きを知るといへども、世間頑迷の女子亦尠からざるべければ、或は是等の説を信じ、以て社會の平面に一大波動を生ぜしむる者有らむことを懼れ、玆に一言を爲すことの已むを得ざるに迫りたり。

凡そ男女の体格及び心性は、共に人類たる上より之を見れば、或は一致する所あるべしといへども、子細に之を觀察識別するときは、其の間、長短大小優劣强弱等の、顯著なる差異を發見することを得べし。是實に生理學上の定論なり。

既に体格心性を異にす。其の任ずる所の事、焉か同一なることを得む。夫事には、通じて爲し得べき所の者あり。通じて爲し得べからざる所の者あり。其の爲し得べきは、同一なる体格心性を通有するに因り、其の爲し得べからざるは、同一なる体格心性を通有せざるに因る。語を換へて之を言はゞ、同様なる事業は、同様なる者の間に行はれ、同様ならざる事業は、同様ならざる者の間に行はる。是亦最覩易き道理なり。これぞ男女職守の各異るべき所以なる。蓋社會細大の事業は、決して一人一已の能く爲し得べきにあらず。四民各業を分ち、職を異にし、互に相救濟ゐて、以つて生養することを得るなり。同一なる体格心性を通有する男子の上に於けるも猶且然り。况して、其の差異の顯著なる男女の間に在りて、其の職守を均一にすと謂はむや。其の異るは、即亦造化自然の

配合にして、社會分業の原則に從ふ者なり。然らば則、女子ハいかなる職守を執りて、いかなる範圍の内に安んじて可かるべきか。

古に曰はく、男は外を治め、女は内を治むと。語甚簡なりといへども、男女生理の上に觀て、造化の幽玄を窺ひ、以つて職守の一大區畫を示したる、所謂拔本塞源の定理とこそ謂ひつべけれ。外とハ何ぞ。社會の外部に顯るゝ表面的事業にして、格段なる腦力及び筋力を要すべき諸般の事これなり。内とは何ぞ、社會の内部に潜む所の裏面的事業にして、格段なる腦力及び筋力を要せざる諸般の事これなり。治國平天下の務、兵役勞働の任、及び哲學物理等の高尚なる學科等は專男子の職守に屬し、内助齊家の務、裁縫炊爨の任、家庭の敎育、疾病の看護、其の他、手指を指用する或る美術上の事業等は、專女子の職守に屬

す。是たゞに古來の風習によりて然言ふにあらず。男女の生理に於いて、誠に爭ふべからざる徴證を有すればなり。

女子の職守ハ、右に述べたるが如く、主として社會裏面的事業の範圍内に止るべし。而して其の餘力を以つては、男子の事業をも補助すべきなり。夫齊家の任、教育の務、事は則小なりといへども、責は至りて重し。一家亂れて一國平なる者はあらず。教育なくして人材を望むべからず。苟も婦女にして專力をこれ等の任務に盡さむか。則其の餘烈は、社會の外部にまで到徹して、粲然たる文明の光輝を發揚することを得べし。これ間接に表面的事業を助くるなり。其の淵源を畜へ、根幹を養ふものなり。婦女の職守亦重からずや。

さるを、世の輕佻浮薄の女子は、此の職守に安んぜず、自巳の權利を伸張せむ

れは、男子と同一なる職守に從ふべしと爲し、其の範圍を超越して、强いて社會の表面に躍出せむとす。此の如くなるときは、勢男子をして裏面的事業を分擔せしめざるべからず。是則内外事業の發達を妨ぐるものなり。何となれば、一人限りある能力を拆きて、内外兩樣の事に當らしめ、かつ其の性質の適せざる所に强從せしむるを以つてなり。而してその害たゞに事業の發達を妨ぐるのみならず、大に社會の秩序を紊亂し、遂に國を破り、家を亡すに餘あらむ。こゝに至りては、彼等が所謂自由權利も、文明の眞域も、全く一の空想に屬するを見るべし。是吾人が、婦女の職守は、裏面的事業の範圍を越ゆべからずといふ所以なり。

然りと雖、吾人はいかなる時と、いかなる場合とを問はず、かくあるべしとい

ふにはあらず。天下危難の際、一家困苦の時等、總べて事情の已むを得ざるに當り、變に應じ、權に所するに至りては、之を例外に置かむとす。要するに、吾人の唱導する所は、普通一般の場合に就きて、其の標的を示したるに耳。

史談

引田部の赤猪子が事

三木五百枝

引田部赤猪子は、雄略天皇の御代の人なり。少女なりし頃、己が里大和の美和河の流にて衣すゝぎてありけり。折しも天皇その邊に行幸したり。ふと赤猪子があるを見給ひぬ。その姿うるはしくうつくし。天皇あはれと思して、「汝は何といふ者ぞ」と問ひ給ふ。「妾が名は引田部赤猪子と申す」と答へ奉りぬ。天皇更に詔ふ樣、「汝成長すとも嫁がずにあれ。朕汝を後宮に納れなむ」と。かくて大宮にかへりましぬ。流れゆく年月ははやく過ぎて、八十歳を經ぬ。待てど暮らせど詔命なし。こゝに赤

猪子おもひけるは、詔命のかしこさに、かくてある程に年あまたを送りつ。黒髪も今は白け、顔はや衰へぬ。あはれ詔命ありとも、今は大宮内にいることかなはざらむ。さはいへこの事申さゞらむもかしこし。いで申さむ。かく思ひ定めて、ある日種々の物とりそろへ、自大宮に參りて獻りぬ。

天皇聞しめしぬ。されど何故とも知しめさず、赤猪子を御前にめして、「汝は何といふ媼ぞ。又何の故ありてかくは參りたるぞ」と問ひ給ひぬ。赤猪子申しけるは、「今は昔、某の年某の日美和河に行幸し給ひしことあるべし。その折その流にて衣あらひ居たる少女を見給ひしならん。さてそれに向ひて詔命下し給ひつらん。その少女ぞこの媼に侍る。それより數多の年をへぬれど、たゞ詔のかしこさに、露たがはでありぬ。この事あらはさまはしくてこそ」と申す。天皇いたく驚き給ひて、「あはれ朕はいみじき過ちしつ。先の事をば忘れてなんありし。さるにてもわが一言のために、あたら盛の年月を徒に過させたりしこそくやしけれ」と詔へば、赤猪子堪へずで泣きぬ。帝の御心はいかばかり悲しくおはしましけむ。かくて御歌など賜ひて老いたるをいたため、その心を慰めたまへり。されどなはあかずや思召しけむ。物など多に

賜ひて、そが操をほめられぬ。いみじかりける女なりかし。世に容貌の美しき女はあり。錦着飾りて、學の術にはこり顔する女はあり。されど心は浮雲の如く、風に任する紅葉の如し。或は小説物語に迷はされ、或は流行に誘はれて、果なく世を送るもの少からずとぞ。然ありても、なほ人の母となり、人の妻となるべしとにや。あはれ、この女鑑讀み給はむ方々よ。赤猪子が操を守りしにならひて、心を貞くし、行を直くせむことを、人にも教へ自もつとめ給ひてよ。

昔より、世俗に論語よみの論語知らずと云ひ傳へたるは、もの學びしても、其學びし事を務め行なはぬが故に、傍觀て嗤笑したる金言なる事は誰もよく知れる所なり。吾黒住宗忠翁の遺訓にも、「假令數千巻の書を讀むとも、天地自然の道理に明りの入らざる時は、其功なし」と諭されたり。君に忠、父母に孝、夫に貞なるは、天地自然の道理にして、人と生れし者は、須臾も離る可らざる道になん。然はあれど、此道理に反ける人は多くして、守る者少なきが故に、守る人あるを見聞ては忠義なりと褒め、行ふ子あるを知りては、孝行人と賞で、節操正しき女を

見ては女鑑なりと吹聴し、かゝる人こそ、誠の人と語り繼ぎ云ひ次て、書にも誌し石にも鐫りて、千萬世迄も不朽美名を殘し傳ふるが、後世の龜鑑となりて、天地に愧ざる人と稱歎せらるゝは、天地自然の道理に明りの入たる人なればなり。それ明鏡は形を照すが爲なり。至道は心を正すが爲なり。人目鏡を失なふときは、鬚眉を正すことなく、人身道を失なふときは、善惡正邪を知るに由なし。故に古人も道は須臾も離る可らずと誡めたり。されば人の父母たらん者は敎へざる可からず。また人の子たらんには學ばざる可からざるなり。かゝる道理を明かに爲さしめんと、黒住の翁も、「立向ふ、人の心は、鏡なり。己が姿を、移してや見ん」と示諭れたるが故に、人の親たる者、其婦女子は敎育し、また其子たる婦女子等も、成人の後は、また人の母となりて、其子を撫養にも、これにならへかしと、天地に恥ぢざる德義を守りし一女子の心の鏡を、此の女鑑に移して、今の女子等の合せ鏡とす。それ日本國中の孝行者忠義者寄特者を部類せる孝義錄中、備後國の一女子の孝節兩道を全くせし一傳なり。

片岡正占

備後國三上郡川西村の百姓助三郎が妻すて。。母は二十五年前に、父源右衛門に離別せられ、繼母は其次の年來り、夫は五年前に此家に入聟し、父は四年前に失ぬ。助三郎が姓質氣短くして、物云ひ荒々しく、母の耳に障りしかば、母は心を傷め親里に歸らせんと云ふを、すては深く悲しみ、「暫時が程心長く待給ひなば、夫の心もなほりもやせん。若し今の如くならんには、母人と共に何方にも移りて養ひまゐらせん」と言ひ宥め。さて夫に云ふやう、「實の母には二歳の時離れ、三歳より今の母に養はれ、人と成ぬれば、實の母よりも恩義深く、殊に子とても無ければ、我々二人を杖柱とも思ひ給へど、かゝる貧しき中なれば、よろづ思ふ儘ならず。迫ては常のあしらひなりと母の心に逆らひ給はずあれかし」とかきくどきけり。親族の者憐れがりて、「かゝる短氣の者を聟としおきなば、家事立ゆくべくもあらずとて、已に離縁させて出しやらん」と云しを、「さあらんには、入聟の事なれば、繼母のいつくしみなき故と、世の言種にも語り傳へんことの跡ましく、且は父の死別の際迄、側にありて見送れるものなれば、失たまひし父に言譯せん便なし。兎にも角にも暫時が程見ゆるし給ひてよ」と云ふに、夫も妻の實意なるに愧ぢて速かに心を改め、家の內睦

ましく成りし事、近村迄云ひもて傳へければ、寳暦二年十二月領主（舊廣島藩淺野知事の祖先）より褒美として米を取せけり、此村は領主の家老淺野甲斐といへる者の給地なりければ、甲斐よりも鳥目若干を與へたりきとなん。

正占此傳を繰返し見つゝ謂へらく、此捨女こそ孝節兩つながら全くせしのみならず、家内をも睦ましくせし人と云ふべけれ。之に依りて思ひ出せり。平政家の歌に、「信濃なる、そのはら（腹）に社、あらねども、我ははき木と、今は頼まん」とよめる歌れ、此捨女が心の鏡を、よく寫せれば、此處に記して、女子等の合鑑とす。捨女が存生の寳暦の昔時は、明治の今に引かへて、邑に無學の地なく、家に不學の兒なしと云ふ時にもあらず。況て山谷邊陬に生れし賤女なれば、難波津淺香山もたど〳〵しかりしに、かゝる心の鏡を殘して今を照し、天下の婦女子等に其影を仰がしむ。實に明鑑と云ふべきなり。

家政

育兒小言（五）

武谷水城

慈母の感化教訓の効徳、男子か成し丶事業の如くに、著明ならぬもの有とは云へ、其心を用ゐて教化爲たる種子の、漸〻に芽を出して、其子成人の後の功業と爲り、千歳の後迄も、世界萬國の人に、人の母たるもの丶鑑と仰きまつられし例し、何れの國にても、亦算へ得られぬ程ある事也、

支那の昔、夏、殷、周、の世を三代と稱へて、歐羅巴の昔の文明國なる希臘、羅馬にも劣らぬのみか、徳育の如きは遙に優りたる國なりけり、其夏の始祖禹王は名高き君なりけるが、まだ壯年の時、塗山氏の女を娶られけり、折しも打續きたる大洪水にて、山崩れ道絶え、萬民の難義大方ならざりければ、婚姻して四日めといふに、時の天子舜より、洪水を治むべき旨を命せられけり、禹は即日家を出で、八年の間家に歸らず、塗山氏は懷妊して男子を生み、名を啓と呼ひけり、幼き時、父、家に在らざりしかども、塗山氏自身の言行を以て能く感化し、朝には書物を教へ、暮にハ禮儀を訓へ、教育怠無りしかば、成長の後、大賢の人と爲れり、禹は洪水を治めて大功あるに依り、舜天子の位を讓られけり、禹王年老ひて復益と云賢人に位を讓らんと定め置れしが、禹王うせられて後、天下の民皆益を君とせずして、啓を君と仰き

き、是我君の子也と云て、歸服しける故に、啓は天子の位に即き、それより夏の世十七代、四百年餘り續きけり、又其次の代の殷の世の始祖、湯王の后有莘氏と云るも、儔ひ稀なる賢女にて、宮中を能く治め、內助の德厚くして、湯王の盛德を天下に普からしめられしのみならず、特に育兒の道に明かにして、三子及孫の敎化を引受、十年一日の如くなりしかば、子孫相繼て位に即き、殷の世廿八代、六百餘年の基を開きけり、第三代の周の文王の、殷に代りて周の世を興しゝも、其智德に依とはいへども、其母の大任と云人亦例し少き賢女にて、文王を懷妊せしより、胎敎を能く守り、目に邪の色を見ず、耳に淫れたる聲を聞かず、口に傲りたる言を出さず、坐作進退を愼み、文王を生て後、敎化具に至りしかバ、文王其性質を受て、智德普く、天下の民歸服しけり、文王の夫人大姒、亦賢明の人にて、能く姑の言行を倣はれしかば、其子武王、周公、共に後世より聖人と仰がれ、終に殷に代りて、周の世八百餘年の基をぞ開きける、元來支那は中昔此方婦人を賤め下す國風なるに、後の世の學者達も、此三代(年數通じて凡そ一千九百餘年)の治蹟、文明の半面は、婦人に依りて開かれたりと云へり、其故は、始祖たる人如何に賢れて英明といふとも、婦

人内助の德なく、育兒の敎を知らず、繼立べきもの不肖なる時は、折角辛苦の創業も、成を守る事能はず、其業忽に覆りて、跡の亂れを生ずる事、國にも家にも、例多かる事共なれバ也、されバ流石に後世の支那人も、支那の後世に類無き彼三代の長き間の治績功業の半をバ、賢婦人が育兒と内助との、功德に歸したるものなり、因に云、斯る外國の例、特に天下の民が、先君の遺言ありし賢人を捨て、我君の子也とて、先君の子に歸服せしを、後世には復あるまじき明德の如くに記録せしなどを思合するにも、我邦三千年來の、聖德の跡こそ、返す〲も尊く賢きはみ也けれ、元來支那は、君臣、父子の道嚴なれ共、古より德ある人に位を讓り、(眞に德ある人に讓りしは上古一二に過ず、)多くは德なきのみか、暴惡の徒、其暴力に依りて位を奪ひ、平民も天子と爲る事、歐羅巴其外の國々と異ならず、世に復有難き我邦君臣の情義とは、全く性質の差ひたる事、事新しく云ふまでも無し、されば我邦人の母たるもの、一通り自國の成立の歷史を承知し、子女の幼き時、此等の話を爲す序に、我邦は歷史上一家にして、君臣とは云へ、父子の親に等しく、恐多き事共ながら、上皇室は、國民の宗家に在しまして、下臣民の家々

は皆其支別(中古以來歸化の人種無きに非るも)支那や歐羅巴の國々の、外國種々の人種さへ混同して、君臣の文字はあるも眞の君臣の情誼といふもの無きものと違ひ、世界に二無き難有國柄といふ事を、朝の寢覺、夕の伽にも、常に語り聞す樣に爲ば、子女の德性を此國特種の性質のまに〳〵涵養し、成長の後、必忠孝の人と爲り、所謂邦の母たる實蹟益擧りて、其國家の未來に於る功德は測られざるべし、さるにても、今日或部の女生徒の敎育風儀の有樣、(獨女生徒に限らされ共)延て全体に及ふ時もあらば、天下の子女、皆彼等の乳養感化を受て人と爲らざるもの無く、後年家の內にも、國の上にも、斯る性行風儀を顯すに至らん事、響の聲に應するが如くなるべし、慨むべき業に非ずや、

又同じ周の世の末に、孟軻と云る名高き學者有けり、鄒といふ所に生れ、早く父を喪ひ、母一人の手にて貧窮の中に成育しけり、此母稀なる賢母なりけるが、孟軻の幼き時、其寓居墓所に近かりけるに、墳を築き、人を埋み、或は泣き悲むなど、葬式の擬似のみ爲して戲れければ、母は屢諫れども聞かず、母嘆息して、此所は子を居くべき塲所に非ずとて、去りて市の傍に寓居しけるに、此度は遊び戲るゝに、物

を賣買する擬似のみ爲たり、母は是も子を居く所に非ずとて、今度は學校の傍に移りぬ、日本にても、支那にても、昔より東洋の學風は、科學の智惠に屬する事柄よりも、徳育を先と爲せる風にして、特に支那の古の小學といふものは、如何なる高貴の人の子にても、小兒の役目として、水を播き、塵を掃ひ、尊長への答へ方、拜揖謙讓の形、坐作進退の禮、先祖を祭る儀式などを敎ることとなれば、孟軻は凡て此等の事を擬似けり、母は大に喜ひて、玆こそ眞に我子を居くべき所なれとて、終に居を定めぬ、母は常に言にて敎るよりも、行にて訓る事の肝要なるを知り、常に自身の行爲を以て感化しけり、嘗て市に居りし頃、孟軻は東隣の家に豬を殺すを見て、何の爲ぞと問けるに、母は何心なく打戯れて、汝に喰しめん爲にこそあらめ、と言しが、やがて後悔して謂らく、古の人は、子を養ふに、胎敎ありとさへ聞つるに、今我子は既に智惠も附き、物の道理をさへ辨へ知るものを、我母の身として、虛言を以て欺くは、子に信ならさる事を敎る也とて、豬肉を買てぞ食はしめける、孟軻成童と爲りて後、久しく他國に遊學して在けるが、母の安否を思ひ、久し振にて、遙々故鄕にかへりて、母を省けるに、母は折節子の爲にとて、機織りて在けるが、

我子の歸り來りしを見て、學びの程を尋ねしかバ、孟軻は變りなき旨答へしに、母は大に氣色を損じて、汝先祖の家をも興し、父母の名をも擧んとて、遙々他鄕に遊學しながら、志堅からず、いかに母を思へバとて、學問未だ大成に至らずして、家に歸り來る事やはある、あはれヶ程の心にては、吾が今日迄の心盡しも其甲斐なく、學業も中途にして廢みなん事、此機の如しとて、刀を取りて、自半織懸し機の糸を兩に切截ちければ、孟軻は大に慚ぢ恐れ、樣々に詫言して、益學問を勵み、遂に大學者と爲れり、其著書は二千年後の今日、遠き歐羅巴の國にまで譯せられて、名を末代に殘しけるも、其原は偏に慈母の感化敎育に依りし事、前々の人既に之を論へり、こは誰人も知りたる陳腐の話にはあれ共、今日は陳腐却て新話の感無きにしも非ず、且さる古書共を披見ん暇無き方の復習にもと、古びに古びたる舊話のまゝを復育兒の訓への例にひきぬるも、世の有樣の、自ら是を要するものあれば也けり、抑世に父なき子程、母の身に取りて責守の重きは無く、又可憐の情の深きは無く、良もすれば姑息の愛に溺れ易きものなり、況してや一母一子、貧窮の中に世を過すをや、居を遷し、豬を買ひ、他鄕に年經る子心の、親なつかしさに不堪して、遙々

故國に歸りしを、貧苦の中に織り成せる、機を斷て打勵ます、是皆一例のみ、二十年間の心盡しの程は如何斗なりけん、斯てこそ眞の慈母とは云べけれ、唐の世の(有名なる人)の誰の母にてか有けん、孟母の傳を讀て泣たるが有き、今日にても試みに身を孟氏母子の地に置き、其古き小傳を讀て、心情を文字の外に解し、雙眼一滴の涙を浮ぶる人あらば、其人必眞正子を愛する慈母なるべし、必家を興し、名を擧る孝子なるべし、

女禮式(承前)

有住齊

一目錄授受樣

横目錄は(是を折紙とも云、横折にして、竪に三つ折にしたるなり、かさね紙に及ばざるを、武家方二枚重ねを用ひ來れり)字頭を向ふにして、右手に持ち出て、(目錄臺に据たるが式也)左手を突き、一禮終りて取まはし、字頭を手前にして、兩手にて渡し少し退くべし、受取人は進み出て兩手にて受取り、少し右の方にむきて、先づ上折を披き、次に下折をひらき一覧し、もとの如くたゝみ、右手にも

ち、居直りて、一禮して立べし、

竪目錄は（是は丸紙を、竪六つ折半に疊む、尊貴の方へは、七折半、八折半にもすべし、二枚重ね、適當なれども、武家方ハ女子の外、一枚を用來れり）右手に持出で、一禮して、左手に取うつし、右手をそへて渡すべし、受取人は、進み出て、右手に左手を添へて受とり、少し右の方に斜にむかひて、右手にて目錄の下をもち、左の拇指を目錄の上の折目の間に差入れ、中はとまで、引下げ、右手にてうは折の中程をもち、一と折りひらきて、扨左手にて末までひらき、品書をあらため、元の如く帖み、一禮して起つなり、

但目錄は横目錄が本式なれども、從前武家には竪目錄多し、男女打交りたる祝物等には然るべきなり、もとより覺書同前の体なれば也、

一同披露の仕樣

横目錄ハ、前に云ふ如く、披露も臺に載てもち出る法なり、字頭を手前にして、持ち出て、臺を進め、言上終りて、又進み出て、上折より披きて見せまゐらせ、終りて元の如く帖み、持ちて立べし、（臺なき時は兩手にて持出て、一禮して進み

出て、前の手順に披露すべし、)
竪目錄ハ兩手にて持出て、一禮して進み、字頭を手前にして、左手にて目錄の上を持ち、右手の拇指を折目の下の方へ差入れ、中程まで引上げ、左手を中はとにかけて、一折披き、右手にて奥の折まで披き、終りて、兩手を目錄の上の端まで引て、少し引揚げ披露終りて、もとの如くたゝみ、兩手に持てたつべし、

一手熨斗拜領

まづ梱際にて一禮し、此方へとあるとき、側近く出てひざまづき、少し進み出て、右手を出し、左手を腕にそへて熨斗をうけ、少し下り右手の下に左手をそへて、肘を突き頭を低れ、つゝしみて戴き、たちざまに懐中して梱外にさがり、一禮して立つべし、若し長熨斗を賜りたらば、左手にうつし、右手にて二三度撓め、二つに折りて、いたゞくものなり、
但是は主從の禮ばかりにあらず、正月などいはひの席にて、のしを出し、口祝することあらば、本文の手順にあつかふべし、

一辭令書拜領

召し出さるゝ時、三尺ほど前にひざまづき、一禮して進み出て、右手に左手をそへて受取り、少し退き披見て元の如く帖み、謹ていたゞき、立歸りざまに、懐に入べし、時により兩手に持て立つもよろし、もし他人に代りて拜受するも同し手續なり、但し數通一度に受取る時は、一々披見するにおよばず、
但立禮の時は三尺手前に足を踏揃へ、一禮して、一足進み出て受取り、一足しりぞき、少し斜にむきて、一見して、又正面に向きいたゞき、兩手にもちてしりぞくべし、

一同渡し樣

辞令をわたす時は、右手に字頭を上にして、前へよせ、腰の邊に持、左手はいつもの通り右手に對してよし、さて坐して渡す時、右手に持たるまゝ、前へ出して、片手にてわたすなり、立禮も此心得なり、

一目錄類拜領

金圓、衣類、器物等を、貴人の前にて賜はる時、竪目錄にして持出る事もあり、其時渡し方ハ、目錄の中程を、右の片手に持出て、賜はるよしを述べ、一禮して

左手に移して渡すべし、拜領の人は、其方に向ひ、口上をきゝ、一禮して進み出て右手に受け、左手をそへて、貴人の方に向ひて、進み出て、謹て戴き、起ちざまにふところにすべし、

但正物の受取わたしは、品によりてかはりあり、箇條書の處々に言べし、

一衣裝類拜領

小袖羽織の類、貴人の前にて、人に賜はる時は、下重を上に、袖たゝみにして、裙を下へ折り、廣蓋に載て袖を上へ折り返し、襟を我左の方にして、左手を廣蓋の下に差入れ、右手にて右の緣を持出て、上座の方におき、賜はる由を述べ、折返したる袖を取り下し、渡して立つべし、拜領の人は、渡し人の方に向ひ、口上をきゝ、一禮して進み出て、廣蓋を兩手に持ち、貴人の方に取まはし、襟の方に進み出て、兩手を下より襟の處にかけて戴き、袖を元の如く折返し、持て、退くなり、盃にそへて賜れる引出物は、通ひのもの出て、まづ廣蓋のまゝ持、下る事もあり、

家内衛生（五）

三笠舍主人

人の食を資る多少は、齡の長幼、身の大小、呼吸の強弱、其外緯度、氣候、職業の異る等に依りて、差ひ有ものにて、其量一定し難し、例之は、寒國の人は熱國の人より、体の温を失ふ事多き故に、之を生ずる事も亦多く、且新陳代謝の機能盛なるも、熱國の人は是と違ひ、總て新陳代謝の機能緩慢故に、寒國の人は熱國の人より、食を資る事多し、同じ人にても、冬は夏より食の進むも、此理に同し、中に就て、小兒又は少壯の人は、こ食を要する事速にして、且其量も割合に多きものなり、是は小兒は云までもなく、二十歳頃までに、日ゝ刻ゝ、其身成育して已ざる故に、呼吸強く、血の運り早く、新陳代謝の機能活潑にして、食の補闕を要する事、速なるに由る、病後の人の、食欲の進むも、亦此理に因るものにて、特に病たる後は、胃腸の機能未十分健康に復せぬ故に、食の進むに乘して、其量を過す時は、胃腸を傷ひ易く、病勢再惡くなる事少からず、特に多くの熱病の恢復期に、此不幸を來す事多し、

身に資りたる種ゝの食は、流動物の外は、胃腸より其儘にて身に吸取る事能はず、

先其一分は、口内にて唾液の爲に消化を受け、(砂糖の類)胃に降りては、胃液の爲に消化を受けて、(肉類所謂蛋白質類)乳糜と名付る乳汁樣のものと爲り、それより小腸とて、百尋の細く迂れる部にて、膵液、胆汁、など云消化液の爲に、殘りの物皆消化せられて、乳樣のものと爲り、主に此所にて、細き血管と、今一ッは淋巴管と爲付くる細き管とより、直接又間接に、血中に吸取られ、殘りの無用物は滓渣と爲りて体外に出、其血中に入たるものは、血と共に肺臟内にて、呼吸に依りて大氣中より取りたる、酸素といふ貴要の物と合し、血に沿ふて体の各部に巡り、諸の器關の組織の古びたるを補ひて、体力を發起し、又其半は体温を發生す、此くして人の身の、生活機嫌を保續するものにて、其殘りの滓渣は、尿、汗、垢抔と爲りて身を謝し去るもの也、故に此等のものは、全く身を養ひ盡したる無用の物にて、是を排泄物と名付く、若其排泄常の如くならさる時は、欝滯して身の害を爲す也、前の唾液其分の諸液は是とかはり、身に必用わるものにて、是を分秘物と名け、妄りに身の外に捨べきものに非ず、支那の古き書に、唾液を玉液と稱して、妄に唾棄るを戒め、嚥下すべきを勸めしも、故無き妄談にはわらず、

濃茶配膳給仕の順

藤井行麿

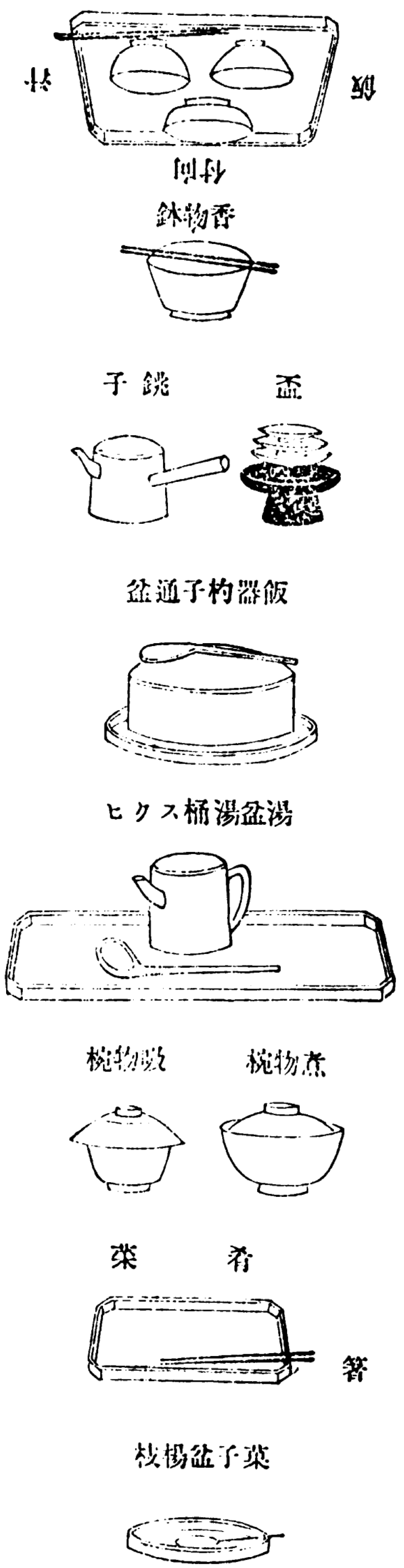
○給仕口を羽箒にて輕くはき、上客の膳持來り、襖を明て、上客より末客まで膳をすゑ、給仕口にさがり据りて、御あがり被下といひて襖をしめ、亭主勝手にて、飯一口、汁一口加減をこゝろみ、酒のかんをよくさせ置て、香物鉢持出るもよし、三菜の時なれば、煮物燒物どちらにても出來次第都合によりて出す、但し燒物引重に入て出すさきは、上に香物下に燒物など入、兩細の箸など打出すべし、次に盃を臺に乘せ、酒次と兩手に持出、一獻づゝ客に酌をなし、銚子持入る、次に飯器の上に通盆杓子を載せ持出、盆をおろし、杓子を飯器にさし込、盆を持、御飯をさし上むといふ、此時客辭退して、こなたへ御任せ被下といはゝ、左候はばと云て、飯器を前向にして、杓子の柄の方を客の方になし、まかせおき、御汁をといひて、上客の汁椀をもらひ、持入て、銚子を持出、上客におつけ、二客の汁椀を持入、上客の汁を持きたり、三客の汁椀をもらひ、持入、二客の汁をもち來り、かくのごとくして末客まで汁を替しまひ、亭主飯器のふたを取見て今一鉢差出し可申やといふか、また客よりいま一鉢と乞こか、いずれにてもよし、

先持入て、此時煮物を出す、煮物椀は膳のまへに引置なり、次に二度目の飯器を出し、酒のかんを改め、銚子を持出、客に預、給仕口に出坐して、よろしく召上り被下と挨拶すへし、此時客より、御亭主にもゆるりと御上り被下といふへし、勝手にて御相伴いたし可申、銚子切候いゝ、御手御ならし被下と云て、襖を〆切、勝手にて亭主もゆる〳〵酒飯ともに相伴すべし、(此間しばらくありてよし)それより吸物を出す、先上客の分一つ持出、まへに置、煮物椀のあきたるを、盆に載て取入れ、殘四人の分は湯盆の上に一つにのせ持出、まへに引て、明椀四つを跡にのせて持ち入給仕口に据り、吸物御すひ被下と挨拶して、爐のまへにゆき、湯相火相を見て、釜のふたをきり置、入て八寸と銚子と兩手に持來り、上客より酌をして、肴をはさみ吸物椀のふたに入まゐらすべし、それより亭主上客の御盃いたゞくべし、其盃を二客頂戴と云はゞ、上客に、暫時借用とことはり置、二客にさすべし、それをまた三客四客と順盃にまはし、末客へ至るとき、亭主いたゞき、末客に返盃、又順にかへし、二客より亭主にやり、亭主より上客に返盃す、これにて盃事すむ、客に上戸の人あれハ、しひ肴、しひ猪口等出し、酒をすゝむるもよし、さて客もはや酒飯とも

十分に戴たり、御湯被下と云はゝ、よきほどにして八寸に盃臺をのせ、片手に銚子を持とり入て、湯盆に湯桶湯の粉すくひをのせ持出、上客にあづけ置、膳付の外吸物椀其外飯器鉢等も、出しあらいみな取入れ、給仕口を〆切置、待合に廻り、烟草盆手あぶり等の火を入替、灰吹をしかへ、露地に水をまき、手水鉢に水をはりなどして、また席にかへり、湯盆に湯桶のふたをのせ持出、本の如くふたをして取入れ、膳を取入れ、菓子を菓子盆に入、楊枝をそへ、湯盆の上に客數ほどならべ、持出てまへに引置、三つ羽持出、爐のまへにゆき、釜のふたを〆、ふたより爐ぶち、爐だん、また水さしの座をもはき、茶道口にさがり、此儘さし上ましやうかと云、客手水もいたしたく、暫といはゝ、左候はゝ腰かけに御出被下といふ、客御都合次第御迎へは御鳴物にて御知せ被下といふへし、同輩の茶友なれは、御免を蒙り打べしといふべし、貴顯がたの御出の時は、かならす御迎に出べし、(但し夏冬にて懐石のふるまひと、炭手前と前後にかはるなり)

出し順　一膳○二香物○三盃銚子○四飯器○五汁を替る○六煮物○七替銚子○八飯器○九吸物○十八寸　燒物有時は七八のあたり出來次第に出すべし、酒はたび

〳〵に銚子とり替、出すさだまりなし、



茶事に十體、八式、十交、十會、十興といふことあり、まつこれよりいふべし、○十休といふは、曉、朝、朝飯後、正午、晝飯後、晩、夜會、殘火、跡見、臨時なり○八式は生茶會、大茶會、散茶、番茶、口切、並一服、二種一碗、香之茶なり、○十交と云れ、貴人、開、名殘、遠客、盆石、移徙、餞別、弔慰、雨中、花見歸、○十會は、香爐、壺、一客、拜領、名物、外題、賞翫、名水、雪、月、○十興といふは、朝顔、一日互會、三轉、輪會、野懸、茶香服、廻點、廻炭、廻花、花寄、本體の仕方曉の茶といふは、夜ごみの數寄にて、むかしははやりしものなり、朝と

按内すれは、客より殘夜露地の体を所望して、夜ごみにまゐることを申入、催主承諾すれば、子の刻よりのちは翌天として、客随意に出向しものなり、貴人または老人などこゝろまかせにすゝみしなり、尤これは夜なかの時秋冬のことなり、つねの仕方は、主方寅刻に仕構へ、客の方半時をゆるめて、寅の半刻に入來す、露地うちすへて燈籠に火をともし、席中には行燈を置、外まはりの戸はのこらず水にしめして立おくなり、豐太閤は、此夜込の茶を好ませられ、夏のころせられたり、香道具またれ物かたりもの、卷もの、料紙、短冊硯箱等出し置、詩歌を催し、時刻をうつす事もあり、初入燈下に炭をして、後入には燈をとり入れ、明はなれて茶を點るなり、此曉の茶に、宗及名水を汲に遣る、使くみ來りて水口を叩く、宗及釜をぬきて勝手に持入る、跡に利休立て爐のまへにまはり炭をおく、宗及濡釜を持出かけつゝ、たかひに興したることありしとなん、

○茶すみて、ハンダ長火箸底取を持出、底をとり、殘すへき火をまへによせ置、灰をまき、炭をおくこと朝の數寄にあり、

○夜込には手水鉢の柄杓うつぶせず、またあらしつよき時などは、鉢にふたすべし、

有明月のころ催し、露地の殘月を賞翫せり、夏は蚊遣に注意すへし、行燈のとり入かた、はやけれはくらく、遲けれはぬるし、窓のわかり工合見て計らふべし、○初入に炭をして、たまご酒、生薑酒、芋さけ等を出し、菓子を引て茶をたて、後に懷石を出す事もあり、

學園

和歌のしるべ（つゞき）

井口隆太郎

語學

和歌を學ぶには、語學を知らざるべからす、如何にとなれば、語學は詞の使ひかた、助辞のとゝのへ等を知るべきものなればなり。語學をしらずして歌をよまむは、猶楫なくして舟をやり、轡なくして馬に乗るがごとし。然れど此の語學の事は、別に標題を掲げて說明せずば、容易に言ひ盡すべきものにあらざれば、後日期を待ちて掲ぐることゝし、此所には、唯歌を讀むに最必要なる語學の中の一篇をかゝげて說

明すべし

語學の中にて、歌學に最必要なるものは、係結とす。此の係結は、初學の徒の中には、往々誤まるものなれば、成るべく心をとめて學びおかざるべからず。

係結

係結とは、上に係としてあらはれたる辞を、下にて結としてむすぶべき詞辞もてむすび、上下の釣合を保たしめ、語句を完全ならしむるを云ふ。

例へば「花は咲きたり」「月ぞさやけき」「雪こそめでたけれ」のはぞこそは係として上にあらはれたるをもて、其を下にてむすぶべき詞辞のたりのり、さやけきのき、めでたけれのけれにてむすぶがごとし。若これを「花は咲きたる」「月ぞさやけし」「雪こそめでたき」なといはゞ大なる誤なり。

係

係はすべて助辞にして、三つの差別あり。これを三段とす。

一段の係　は　も　の　が

二段の係　の　が　ぞ　や　か　なむ

三段の係　こそ

此の三段の係は、おのづから輕重の差別ありて、一段は最輕き係にして、二段は一段より重く、三段は二段よりおもし。故に一段の係はいくつもかさなりてかゝることあり。

例へは「春ハ。花さき、夏は。郭公なき、秋は。紅葉し、冬は。雪ふる」「花の。咲く枝は。鶯もやどる」のごとし。此はみな一段の係なれば、さしつかへなし。

二段はやゝ重き故に、一段とはかさなりても差支なけれど、同じ二段の係、及び三段の係とかさなることなし。

例へば「春は花ぞさく」のはは一段の係なれば、二段の係のぞとかさなりてもよし。されど「春ぞ花やさく」或は「春こそ花ぞさく」などの如く、ぞとやとかさなり、或はこそとぞとかさなるごときことなし。

三段ハ尤重きものなる故、一段とはかさなりても差支なけれど、二段と三段とかさなることなし。

例へバ「春こそのどかなる花はさけ」とはいへど、「春こそのどかなる花ぞさけ、」或は

「秋こそかなしき」「虫なきてあはれにさびしきこそとこそおほけれ」などのごとく、こそとぞとかさなり、或はこそとこそとふたつかさなるやうのことなし。

又一段ののとがと、二段の係ののがとは、重くかゝる時は一段となり、輕くかゝるときハ二段となるなり。

例へバ「花の見ゆ」「花が見ゆ」といへば、輕くかゝる故に一段の係となり、「花の見ゆる」「花が見ゆる」といへば、重くかゝる故に二段の係となるがごとし。

又のがの助辭は、接續の助辭となることあり。其の時は係にならず。

例へば「梅の花」「秋の月」「梅が枝」「君が世」などののがは、みな名詞と名詞とをむすびつくるものなれば、係にならざるがごとし。

百人一首和歌解（つゞき）

井口隆太郎

文屋康秀

吹くからに秋の草木のしをるれぞうべ山風をあらしといふらむ

秋の山から吹きおろして來るところの風を見ると、ひどく烈しい者であつて、秋の野山に生てゐる草も木も、みんな萎れてしまうことである。其だからして、昔から山風を嵐とは云ふのであるだらう。成程こんなに烈しいものだから、山風を嵐といふのも尤なことである。

うべとは、もつとももといふ意なり。山風をあらしとは、山風の二字を約めて一字にすれば、嵐といふ字になるより、かくはよみたるものなり。

大江千里

月見ればちゞにものこそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど

ある秋の空淋しくさやかに照りて居る月を見ると、種々樣々なことが思ひ出されて千々にものがなしくなる事であるが、どうして此んなにあるのかしらん。丸で秋の悲しさは、自分が身ひとつに集つて來た樣である。其でもよく考へ見ると、自分が身ひとつの秋ではないのに、どうして此んなに悲しくあるのであるかしらん。誠に悲しい事ではあるわい。

管家

このたびはぬさもとりあへず手向山もみぢのにしき神のまに〳〵

惣体神におまゐりをするには、幣といふ物を手向くるのがあたりまへであるけれども、此度ハ大變急いでおまゐりをしたのだから、其の幣もとりあへずして來たのである。就てハ此の手向山に、丸で大和錦を織りはえた樣に、木々の葉が紅葉をして居るゆへ、此の紅葉の錦を、幣のかはりに手向けますから、神の御心のまゝに御覽なされて下さりませ。

手向山とハ、山の名の手向と、神に物を奉る意の手向と同じ意なれば、幣を手向くるといふ意を、山の名によそへたるなり。神のまに〳〵とは神の意の儘にといふ意にて、御覽下されといふ餘意をふくめたるなり。

三條右大臣

名にしおハゞあふ坂山のさねかづら人にしられて來るよしもがな

彼の有名なる逢坂山に生へて居る蔓は、あちらこちらに長くはひわたつて居るから、根を取つて引くと、方々から其の蔓のえだが來るといふて、大變名高いものであるが、果して其の名に負うて居る通りであるなれば、彼方もあの蔓の枝の來

るやうに、他の人のしらぬ樣に、こつそりと私の宅へお出でなさるやうには出來ますまいか。どうかしてお出でなさる樣に願ひたいものであります。

名にしおはゞあふ坂山のさねかづらとれ下のくるといふことをいはん爲の序なり。さねかづらとれ蔓のことを云ふ。‖さはそへて付けたる辭なり。

貞信公

小倉山みねのもみぢ葉こゝろあらば今ひとたびの御ゆきまたなむ

小倉山の峯の木々の葉が紅葉したありさまは、實に奇麗なものであつて、丸で錦の樣であるが、此れも幾日か立つと、見る影もなく散つてしまうであらうが、誠にをしい事である。若此の紅葉が心あるものであるならば、せめて今一度天皇陛下の行幸のある時まで散らずして居て待てもらひたいものである。さうすると天皇陛下を始め奉り、吾々も御供をして來て、思ふまゝに見るであらうから、どうか其れ迄は散らずして待つて居てもらひたい。

中納言兼輔

みかの原わきて流るゝいづみ川いつみきとてかこひしかるらむ

和泉の國に瓶の原といふ處があるが、其處に水が湧き出でゝ流れて川となり、いづみ川といふ川がある。其のいづみ川の名の如く、自分は彼方を何時見た事があつてかしらん、此の頃は非常に戀しくなつて來て仕方がない。どう考へて見ても彼方に逢て見た事れない樣に思はるゝのに、如何してこんなに戀しいのであらう。みかの原わきて流るゝいづみ川とは、次の句のいつみといふ事を云はん爲の序なり。いつみきは、何時見きといふ意を、川の名のいつみといふ緣よりして云へるなり。

源宗行朝臣

山ざとは冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば

田舍の山ちかい里に住で居ると、冬が一番さびしさのまさるものである。春ば木々の花が美しく咲き、秋れ紅葉が錦の樣に立派であるから、都の人々が絶えず來て、さびしい中にも賑であるけれども、冬になるとさつぱり來ぬ樣になつてしまい、其のうへ草もかれはてゝしまつたと思ふと、猶更さびしくなる。其れだから山里は冬が一番淋しい時である。

人めとは、人目にて、人の見る目を云ふ。かれとは、遠く離るゝことをもいひ又草木などの枯るゝをも同じくかれといふより、こゝにては人目の離るゝと、草の枯るゝとの兩意をこめたるなり。

漫録

清少納言（承前）

小野利三郎

清少納言の忠實なりしことは、枕草子に、

故殿（道隆）などおはしまさで、世の中に事いでき、物さわがしうなりて、宮（定子）又内裏にも入らせ給はず、小二條といふところにおはしますに、何となくうたてありしかば、（讒言せられし時なり）久しう里亭に居たり。御前わたりのおぼつかなさにぞ、猶え斯はあるまじかりける。

又后宮の御乳母の、日向へ下らんとすることを記せる條に、

あかねさす、日に向ひても、思ひいでよ。都は晴れぬ、ながめすらんと、

御手づから書かせ給ひしあはれなりき。さる君をおきたてまつりて、遠くこそ得いくまじけれ。

など、ところ〴〵に見えたるにて考ふれば、かくあさましき世にも、少納言の皇后宮に忠實なりし

を知るべきなり。世の有状に引くらべては忠實のほども、さすがにふと、うちかたぶく人もあるめれど、されどこは原因あり、即ち皇后宮の淑良におはしけると、使ひ給へる女房に、慈愛をたれ給ひしとなり。枕草子に、

（前略）然ることやありしと問はせ給へば、知らず。何とも思はでいひいで侍りしを、行成の朝臣のとりなしたるにや侍らんと申せば、とりなすとてもとうち笑ませ給へり。誰かことをも、殿上人褒めけりと聞かせ給をば、さいはるゝ人をよろこばせ給ふこそありがたけれ。

かゝるありがたき御心ばへおはしましけるを、學の道にもいたりふかく、人の道心得たらん者いかでかつれなき御心になしまゐらすべき。そをつれなき御有様になしまゐらせし世の人こそ、中々にいみじうあやしけれ。皇后宮のかくれさせ給ひし年の五月、即ち長保二年のことなりけり。（十二月十五日崩御）少納言に、

皆人は、花や蝶やと、いそぐ日も、わか心をば、君ぞしりける。

と書きて、與へ給ひしことあり。かく人よりは、ことなる御信愛さへあり。少納言の節をかへずして、陋屋に蟄居しをはりたるは、異しむべきことか。

然るに、世人は動もすれば、紫式部に心酔するのあまり、比較のために、その好配者なる清少納言の長所などはさておき、ひたすらに、その短所をのみ發かんことをつとめたり。文學士某氏も、嘗

て清少納言の婦徳の缺けたるを論じて、紫式部の中宮に愛せられ、世に持てはやされて、その身を終へしは、謙遜辭讓の徳のいたしゝところ、清少納言の人に惡まれ、晩年にいたり、非常に落魄せしは、驕慢なりし結果なりといへり。噫。

孔子に陳蔡の厄ありしを以て、誰かは徳至らざるところありとする。管公に遷筑の寃ありしを見て、誰かは徳缺けたるありとする。世人は、孔子管公の聖人賢人たりしを以て、直に寛假するにはあらざるなり。陳蔡遷筑の厄寃は、他に已むを得ざる原因ありしを知ればなり。その厄寃は、決して徳の如何に關係なきを知ればなり。某氏若し藤氏專權の折の歴史を繙かば赧然たらんのみ。勿論余れ紫式部の婦徳修れり、との説に反對せんとするにはあらず。唯、人に愛せられ行末榮えたるも、人に憎まれ行末見苦しきさましたりしも、皆婦徳の結果なりといふに至りては、その不穿鑿に驚かざるを得ず。そはともあれ國文學の恩人たる少納言のために進みてその誤を正さゞるを得ざる也。

（未完）

駒の贐（承前）

忍の舍主人有義

舅姑は天より我に授玉ふ家の親なれば、則我父母にて候。其舅姑への事へかたはと申に、愛敬の二ッに止まり候。舅姑を實心よりいとをしく大事に致され候心、毛厘も僞りなく、眞實に事へ申されべく候。婦の舅姑に事ふる事、鷄初めて鳴て咸

盥嗽と手洗ひ口すゝぎ、髪貌取整へ、舅姑の前へ出、氣を下し聲を怡ばして、衣服煖寒疾痛苛癢を伺ひ、其節に應じ撫さすり、或は先んじ或は後れて附從ひ、「柔色以温之」とて、いかにも此方の心を柔に、温は承籍なりと註して、物をうけしく心にて、我心の柔順なる上へ、舅姑の心を受け載ると申事に候。ふつくりとしたる物には。其上へ乘るものゝ受味も、快きものなれバ、おのづから舅姑の歡を得る事に候。都て舅姑の身に親しく着し玉ふ物は、敬みて褻汚さぬ樣にと心がけ、舅姑命あれば、速に應對、進み退き周旋するにも、心を用ゐてしとやかに愼み、欠伸跛倚唾洟せずとて、假にも恭敬を忘れず、怠慢を戒むることに候。無聲に聽き、無形に視るとて、いまだ親の物云ひ給はぬといふとも、もしは物いひ玉ふときに、聞違ひもせんかと恐れて、物いひ玉はぬ内より心をつけ、親の動作し玉ふときに、もしや知らですぎなんかと、動作し玉はぬうちより、氣をぬかさぬやうに心得、我身高きに登らず、深きに臨まず自愛し、苟且にも人を訾り笑ふ事等を愼むは、を過ち辱しむるに至らん事を恐れ戒むるにて候。又禮記に、父母在せば敢て其身を有とせず。敢て身其財を私せず。民に上下有るを示すとこれあり候。子婦たるもの其身を有とせぬとは、我身を我物とせぬ事に候。此身を我物とおもひ候より、苦勞の事には疲倦を生じ、不勝手の事には不快の念生じ易く候。我身を我身とせず、父母舅姑の物と、しかと心得候へば、いかなる事にても、私の念は

起らぬ事に候。財寶も其如く、我物と思ひ候より惜しきほしきの心も起り候。家財は皆父母舅姑のものとおもひ候へば、是又私する心は生ぜぬ事に候。是れ上に父母舅姑あれば、下の子婦たるものはかく有べき事と云をしへ示されたるに候。内則に子婦の孝なるもの、敬なるもの、父母舅姑の命に違ふ事なかれ。怠ることなかれとこれあり候。父母舅姑の我を愛し給ふをたのむ心あれば、其命じ玉ふことにも随ばず、つとめぬに至り候まゝ、決して命に逆らひ命に怠る事有るまじく、速に順ひつとむべきの戒に候。前にも申通り、其身を有とせず、その財を私せるざゆゑ、自分の貨、自分の蓄、自分の器といふはあらずとすれば、人に私に物を與へ、私に物を貸し候事は有まじき事に候。もし飲食衣服をはじめ、何か物を他より賜はる事あれば受納し直に舅姑に獻じ、舅姑受納し玉へば、怡て新に賜ものをうけしごとくおもひ、もし又其品を返し玉ふ時は、一通り辭退し聞入玉はぬときは、更に賜はりし如くして、其品は納め置き、他日何か舅姑の事闕るとき、又獻ずべき事に候。若婦たるもの、私親兄弟に、何か有て物與へんと欲するときは、其よしを具に舅姑に請ふて、許をうけて後わたふべき事に候。一事として舅姑の命に逆はず、何事も舅姑の意に從て取行ふべき事に候。曾子の詞に、孝子の老を養ふや其心を樂ましめ、其志に違はず、其耳目を樂ましめ、其寢所を安んじ、その飲食を以て是を忠養すと申され候。其の字皆舅姑をさしいふにて、其心を樂ま

しむるとは、其心を怡ばしめ、其志に違はぬとは其志し玉ふ筋を承順するにて候。我聲を怡ばして物申は、其耳を樂ましむるにて、顏色柔にして請答へするは、其目を樂ましむるにて候。昏に臥し玉ふときは、其時の寒暖に隨て心を用るが、其寢を安んずるにて、晨に起き出で玉ふときは、其日の安否を懇に問ひ伺ふが、其處を安んずるにて候。兼て口腹に叶ふ品もてまめやかに養ふが、其飲食を以て忠養するにて候。舅姑我を愛し玉ふときは、怡て忘れず。舅姑もし惡み給ふときは懼れて恨むべき事はなく候。何か又舅姑心得違ひ玉ひて過有ときは、我氣をいかにも下し靜めて、顏色を怡ばしめ、聲を柔にして、諫申べき事、是又子婦たるものゝ忠にて、親の過を其儘にうちすぎ、慹然としたるは、深愛あるとい申難く候。もし氣に障りて怒り玉ひ、撻て血を流すとも、すこしも疾み怨むることなく、ますます敬しますく孝を盡すべき事に候。羅仲素の詞に、天下に不是底の父母なしと申ことの候。父母といへば舅姑もおなじ事にて、是は天下にあしき父母舅姑と云ふは是なく、天地の間に子を愛せぬ親はなき事にて候。子たるもの孝行にさへ事へ候へば、怡び樂むに疑ひなき事に候。子婦たるもの、已が孝養の屆かざるを忘れて、父母舅姑の不是なる處に先氣がつき候より、いふべからざる不義不孝にも至るにて候。然れば天下に不是の父母舅姑なしと慥に心得、父母舅姑の我を愛し給はぬは、わが事へかたの行屆ざる也と、我身に立歸り、猶々孝

養を盡し、愛敬を勤候へば、必しも父母舅姑は豫を致すにて候。

禮記に、夫婚禮は萬世のはじめなりと有之、子孫繁榮相續するの基爰に起るにて候ゆゑ、萬世のはじめなりとハ申事にて候。本異姓を娶るは、遠きについて別を厚うする爲にて候。幣を誠にし辭を腆うするは、直信を示す所以にて、信は人に事る道にて、婦德の第一に候。牢を共にし巹を合しては、再び改め他適せざる貞信の操にて候。男女別有て後父子も親しく、父子親して後、義も生じ義生じて後、禮も作り、禮作て後、萬物も安き事にて候。もし別なく義なく候はゞ、禽獸にひとしきことに候。男女の別を正さんとてハ、宮室に內外を辨じ、男子は外に居て內を云はず、女子は內に居て外を云ハず家を治るにて候。別とハ男女の間じだらくになき事にて候。それゆゑ夫婦の衣服器用迄も混ぜぬやうに仕末するにて候。孔子の御詞にも、婦人は人に伏するなり。このゆゑに專制の義なしと被仰候。伏とハ家を立てず人に屈し從ふ事に候。女は陰なれは男子と違ひ、柔順を專一とするにて候。曹大家の女誡にも、卑弱を第一として、いかにも身を遜り、物和なるを貴ぶ事にて、何事も人を先にし己を後にして、善事ありとも伐らず、驕らず、よし人の彼是いふにも、夫を辨じ爭はず、恐れ愼み人に下り、夙夜つとめ〳〵て、我が爲すべき事を整へ納め、操正しく夫主につかへ、清靜といさぎよく物靜なるべく候。夫婦の好は終身離れぬもののゆゑ、動もすれば褻れ易

く候。媟れば夫を侮る心も生じ、いふまじき言も發するに至り候。夫婦の間ハ義和恩好を以て親しみ合するものなるに、若此間に怒り爭ふことに至れは、恩義ともに廢して、終には夫婦の間も離るゝと、曹大家も誡め置き候。夫は天なり。天には遁れべき樣はなく候。其ごとく夫にハ離るべからざる事に候間、夫には心を 專にし、色を正し禮義を過たず、潔き場に身を處し、言ふべからざる事はいはず、視るべからざる事は視ずの誡めを、よくつゝしみおもひたまふべきことに候。

舅姑夫主の心を執得候も、家内叔妹の心を得ざれバ、是も亦家の齊はざるにて、はて〳〵は舅姑夫主の心にも違ふこと出候なれば、心を盡して厚く親み睦ひ玉ふべき事に候。人として過なきはなし。物ごとおもひやり有て、召仕玉ふものまでも情深うし、善事あらば顯し、あしき事あらば掩ひかくすやうにと心得らるべし。淘淵明か、子のもとへ下人を與ふる文に、是も又人の子なり。此者の親も汝を我おもふ樣に有るべければ、目をかけよと申越せしとぞ。思ひ玉ふべく候。人を愛するものは、人恒に愛し、人を敬するものは、人恒に敬するとあり。汝に出るものは汝にかへるものなりと、賢き人の詞もありて、皆此方よりの仕懸次第なるものに候間、萬事已に立返り愼み玉ふべき事に候。

右ハ聖賢の教へ置かれし事ども、あら〳〵書き記し進じ候。前にも申通り、女は夫主の家か我家にて、戸田家の家法は、則其許の家の我家

と申ものなれば、里元の家事家法に執着なく、戸田家の家法にすこしも違ひ玉ふまじく候。當家より嫁し申され候ことに候へば、家來中迄も定めて尊崇いたすべく候。必々里元を挾み申されず、分に安んじ足る事を知り玉ひ、謙遜辭讓を専とし、行末目出度繁榮いたされべく候。呉々數馬が書き記し候一冊に洩るゝかたなく盡し候へは、老態の禿筆、文も拙く用にはたつまじく候へども、旅立玉ふ駒の餞までに申進し候也。文政四の年春如月。

貞烈鑑　海鶴仙史

人の妻たるものゝ、よく夫にかしづきつかへ、子をやしなひそだつるは、當然の義務にして、なにがしの妻は、よく夫にかしづきつかへ、子をやしなひそだつ。誠に貞烈よのつねにあらずといふものこそな、か〳〵によのつねにあらずといふべけれ。故に夫つゝがなく、子さはることあらず、あまつさへ家とみさかえたらんには、貞女烈婦のあるべき道理なし。玉ハ錦繍の上にあらはるゝも、塵土の中にうもるゝも、おなじ玉にして、夫つゝがなく、子さはることあらず、あまつさへ家とみさかえたれバとて、貞女烈婦はおなじ貞女烈婦なりと、なんずる人もあるべし。これ誠にさることなり。されど人の心は、行にあらはれてのち知ることをうべし。行ハ事にのぞみてのちあきらかなることをうべし。夫つゝがなく、子さはることあらず、あまつさへ家とみさかえたらんには、いかで

髪をきり機をたち、義をまもり操をたつることをえん。いかに貞女烈婦の心ありとも、貞女烈婦の行なからん、誰かその貞女烈婦たることを知らん。故に貞女烈婦は、非常の變にのぞみ、不幸の時にあたり、卓然として志をかへず、行をあらためず、富貴の爲にうごかされず、婬欲の爲にうつされず、常に夫を夫とし、子を子として、のちあきらかなることをうべし。されば貞女烈婦といはれんは、世にありがたき名譽なれども、又世に貞女烈婦といはるゝ程の不幸はまれなるべし。夫の富貴につれて、食に鼎をつらね、坐に褥をかさね、春は花をながめ、秋は紅葉をめで、一年三百六十五日うきこともなくて、明しくらす人々よ。暇あるごとに、貞女烈婦の傳をよみて、わが僥倖をよろこび、かれが不幸をあはれまでやはあるべき。さるを當然の義務なる、夫にかしづきつかへ、子をやしなひそだつることをさへうち忘れ、おのが思ふまゝにふるまひのゝしるは、人としもいふべきにあらざるなり。

貞女烈婦は、和漢にそのためしすくなからねど、栗女ほどのものはまれなるべし。不幸の人は、古今にそのたぐひおほかれど、栗女ほどのものはすくなかるべし。おのれ今五井蘭洲のしるす所を譯して、世の妻たるものゝ鑑戒となすべし。栗女は甲斐の國田中村の百姓なにがしの女なり。幼にして父母をうしなひ、村長なにかしの家にやしなはる。村長栗女の人となりをめで、衣服調度みにくからぬほどにとゝのへて、同村にすみける安兵

衛といへるものになんよめいらせける。幾程もなく安兵衛悪疾にかゝりて、たちゐ自由ならず、日夜牀蓐にのみふしゐたり。されど栗女はいさゝかもいみきらふ必なく、晝は夫にかはりて田をたがやし。夜は家にかへりて藥餌をとゝのへ、看護おこたることなく、又暇あるごとに糸をつむぎ機をおりて、いさゝかの錢にかへ、薪炭などの料にあてけり。舅六右衛門といへるは、年古稀をすぎし老人なり。栗女はかく夫をいたはるのみならず、又よく此の舅をあはれみ、舅野山にいでゝあそぶことあれは、かならず湯茶をもちゆきて、そが安否をとひ、遠くいでておそくかへれは、かならず村はづれまでいでゝむかふるなど、親切至らぬくまもなかりけれは、一村こぞりて嘆賞せざるものなかりき。嗚呼夫は妻たるものゝ、身をおふるまで、あふぎのぞむ所なり。さるを夫やみて事にたへず。舅耄して家おとろふ。いかでか身を託するに足らん。まして悪疾は人情のなべて憎む所なり、あまつさへ年なほわかうして子なし。天下何人か之をすてゝ更によめいることを求めざらん。栗女のごときは、誠に孝にして義なりといふべし。さるを天道何事ぞ。一夜洪水横流して、夫妻ともに魚腹に葬らる。今その事のもとをたづぬるに、享保十三年戊申七月八日、大風暴雨俄かにおこり、川水みなぎりあふれて、隄をかね陸にのぼる。その勢ひの猛きいふばかりなし。田中村はあたかも其の下流にあたれば、夜中人あり。水なり水なり。はやくのがれよとさけびてはしる。此のとき安兵

術やまひやゝおもり、手足くされて肉なかばおち、身をおこすさへ自由ならず、いかで戸をいでゝ寸歩することをうべき。やがて栗女にむかひて、おのれは今水におぼれて死なん程に、汝はすみやかにのがるべし。日頃かゝるやまひをもいとはず、湯藥看護なにくれとなくなほざりならざりしに、いのちおいらんのちといへどもわすれまじ。父は年おい給ひたれど、汝はなほわかゝり。願はくはいのちをたもちて、家をほろぼすことなかれ。おのれのやまひかくのごとくなれば、初めよりいきながらへん心なし。水におぼれしなんは、せめてものさいはいなり。かくいふうちにも、時おくれなん。はやく外にいでよといひければ、栗女涙をながして、年頃つれそひまゐらせしを、今かゝる危難にのぞみて、いかでかみすてらるべきと、いひもをへざるに、戸の外にはかにさはがしくなりて、あるはなき、あるはさけび、口々に、水音ちかし。はやくせすは死なんといふ。栗女も今は猶豫なりがたければ、とりあへず舅をたすけおこして、戸の外におしいだし、はせさる人をよびて、此の翁の命をすくひ給へとさけぶ。舅之をきゝて、汝もはやく夫とゝもにきたれ。さらずば、われもともに死なんといふに、妾は夫をともなひてまゐるほどに、御身は足おそし。まづゆき給へとて、舅の副衣および地券を油紙につゝみて、其の人に託し、さて室にいりて、夫のかたはらに坐し、心靜にともにおぼれにき。水しりぞきしのち、人々栗女の志をきゝて、おの〳〵錢物をいだし、瑞蓮

寺といへるにて、後ねもごろに吊ひけり。甲斐の國の邑宰小宮山なにがし、其の狀を具して、幕府にきこえければ、黄金若干をたまふ。邑宰やがて烈婦の碑をたてゝ、其の事を不朽につたへたりといふ。

（未完）

按摩は學びたりや　伊藤武壽

昔、有名なる室鳩巣先生、道話の爲、諸國を遍歴せられける折、或村にて、女子の道を說かれたる一條の物語あり。一日先生修身齊家の道を諭し賜はれとて、或家に招かれけり。そも此家の主人ハ、いとまめなる者にて、早速先生の訪はれたるを喜び謝し、諸事萬端何呉となく厚く禮遇したり。さて、此家に一人の娘あり。年紀方に二八の盛りを迎へ、容貌勝れて美はしく、人品も賤しからず、鄙には最珍しくぞ覺ゑける。こは主人の愛娘にて、主人は富有の身にし有りければ、讀書縫針、一通の女の道は申すに及ばず、歌咏む業、絲竹の調より、茶の湯、挿花の遊藝に至るまで、殆學ばせぬ藝も無き程にて、平生主人の自慢娘なりき。去れば室先生の來宿に付きては、此娘終日侍きて、先生への接待給仕に、甲斐〳〵しくぞ勤めける。先生も其の年若き賤の乙女に似もやらず、萬事に物識り多能なるを深く賞しければ、主人も娘も忽慢心の鼻を動かし、主人は娘に命じて、それ今度は何々の歌を咏みて先生の御目に掛けよ。琴を彈で、先生の賞詞を戴け。新茶を立てよ。挿花ハ如何せしぞと、種々の藝をせしめけり。娘ハ意氣揚

〵として、何れも心得候ふとて、拙き歌ども幾つともなく短册に認めて、先生の前に差し出し挿花はかやう〳〵の方法あり。遠州、池の坊、其他の流義も少からず。此れなる菖蒲、それなる菊は、何流の活け方にて候ふなど丶、いと誇り顔に言ひ出でぬ。先生之を見て心には最惡く笑可しく思はれしかど、わざと主人に向て、扨て〳〵能くも、種〻の藝を心得られしことかな。十六七の乙女子が、此處までに心掛くるは、なか〳〵容易なることにはあらじ。貴殿の教育誠に感じ入りぬと申されければ、主人は喜悦の色滿面に溢れ、さ候ふ。女子の業學びハ男子と異り。此處までには仲々易きことにハ候はず。今の世の女子を持ちたる親達は、讀書きも碌々習はせぬのみならす、縫針の業だに敎へぬもの多きは、普通の事にし有れど、拙者は兼々娘には學問技藝を十分に學ばせ、世に立ち夫を持ちても愧かしからぬやうせんと思ひたる甲斐ありて、斯くまでに成りて候ふと、誇りかに答へぬ。

先生聞きて、如何にも女子なればとて、物學びの道を不用とハ申し難し。貴殿の用意、娘御の丹精には感じ入たり。就いては尚此外に、按摩の藝なども學び心得られたるべし、是はいかにぞと申されければ、主人は奇異の思を爲し、そは何と仰せ賜ふぞ。愚昧の小生にハ解し難く候ふと申しけるに、先生云はる丶は、いや按摩のとなり。人身の上下揉み柔ぐる術なりと、主人は之を聞きて、忽心中に怒を含み、左樣なる下賤の業は、固より敎へ申さずとぞ答へける。

（未完）

婦女乘馬考

青柳高鞆

男子の馬に乘りしは、古事記に大國主神の、馬の鞍に御手をかけ、鐙に御足を踏入たまひしこと見えたれば、神代よりの事なれども、婦女の馬に乘りしは、上古よりの慣はしなりや知るべからねど、馬に乘りたるにハ違ひあらじ。さてその乘りざまは如何といふに、西洋婦人の如く横に乘りたりしなるべし。其證は、日本紀天武天皇十三年閏四月の詔に、女ノ年四十以上ハ髮之結不レ結及乘レ馬縱横並任レ意也と見え、また同紀十一年四月の條に、婦女乘レ馬如二男子一其起二于是日一也といふ文は、黒羽本の備考にいはれし如く、十三年の詔の下に有りしを、後に誤りてこゝに入りしものと思はるれば、縱横任レ意の四字と、婦女乘レ馬如二男子一此起二于是日一也とある文とに心をとめて見ば、此御世より縱にも乘ことを許されしなり。かく詔らして、舊き慣を改められしは、此御世ごろハ、何事も支那の國風を好み給ひしこと、往々史書に見えたれば、支那國婦人の乘馬は、縱横いかゞありしかは知らざれども、若くハ男子の如く縱に跨がり乘れるからに、その國の風に摸擬て改め給ひしにもあるべし。

笑ひ草一種（石原氏年々隨筆所載）

敎の舎主人

今は六とせばかりにならんかし、麻生の谷町に喜八といふ工匠あり、一日たちまち物狂をしての丶

しりさわぐを、妻おどろきて、あたりの人々につぐるに、皆來つどひて、制すれどさらに叶はず、これがいふやう、穢れたる木して宮居立たるいみじう腹だゝしきに、おのれが世のかぎりかいそひて物にくるはせむといひつゝ立さわぐ、人々せむかたなくて、其ゆゑをよくもとむれば、何がし殿と申す大名おはします、その里第の稲荷の社を、修理せられたるに、喜八その事うけ給はりて造りたるが、穢にふれたる木を二三ばかりまじへ用ゐしなりけり、そはおもひかまへてせし事にも侍らず、心づかでの怠なれば、さしもなやまし給ふな、此の物くるひだになほり侍らば、やがて取かへ清め奉らむと、かしこまりねぎ申せど、ゆるぐけしきもなくて、二三日は過ぎぬ、夕つかたいとゞくるひまさるに、此あたりの鳶の者何がしとかや、喜八が家などたつる時は、つねにつかはれて世をわたるものなり、かう物狂すときゝて、とぶらひに來たり、腰のあたりに着るものけしきばかり、引きまとひて、かみもしもゝ裸のまゝにて、つと入來ていふやう、いかにぞ喜八は物にくるふといふはまことかといふに、喜八かしこまりて、さる事侍れど、これはたゞかりそめなる事に侍るを、こと〱しく人の申などにやと、ふるひ〱いふさま、いたうおそれたりとみゆ、此のをとこはつね喜八が頤の下にてめこをもやしなへば、おのれこそおぢしたがふ事なれ、打かへしかうするがいと心えがたけれど、さばれおどしてむ、たま〱おつる事もこそあれとたけくおもひなりて、

いたういかれるさまして、なでう狐がこの喜八をなやますらん、とくおちなんや、さらずはからきめみせむといへバ、いよ〳〵かしこまりて、今おち侍ぬべし、いたうなせめ給ひそと、てを押すりてわぶ、汗わえ涙おとして、いとくるしげなり、さらば必といひて出て行く、跡にて物にくるふ事たゞおなじさまなり、家のうちの人々、などかうおそれつらん、猶物わざむく狐のしわざかとおもひをり、かのをとこもおなじやうに心もえねば、又の朝とく來たり、喜八見るよりおそれかしこまるさまきのふに異ならず、さては欺くにはわらじとおもひて、などかおちさらむ、たゞとく〳〵と責もよはして、さてかへりぬ、出ていぬるかげ見送りて、物くるひ高やかに打わらひて、をこのやつかな、おのれを恐るるとおもふよといふ、さはなど今はおぢつらん、いとくるしげにみえつるものをといへば、物ぐるひ、さるゆゑある事ぞかし、おのれむかし熊野にすみし頃文覺上人の荒行すとて、那智の瀧にうたれておはしつるを見たりしに、けしきいみじう、顔つきたけくいかりて、いとこそおそろしげなりしか、かれが肩腕にそのかたを畫きたるをみれバ、たゞそのをりの心地して、身にしみておそろしさに、おぼえずかしこまるにこそわれとこたへしかば、人々わきれながら、かつはうれしうて、かの荒行の繪を物にかきて、壁におしつけて置しかバ、物くるひ見るたびにいみじうおびゑて、つひにおちにけり、

めざましぐさ寓意艸抜萃（承前）

井上頼文

○うさぎがた

みちのくの山に、兎のなりに、雪のふれる所ありと、都にて或人のかたりし、信夫とよね澤のあはひに、東がたけとて、きた南十里あまりつゝきたる山あり。山のなりの家のやうなれば、やかた山ともいへり。小ふドといふ峰あり。信夫より見れは、駿河なる富士の山に、いさゝかもかはらず、この峯の東のかたに、卯月初ばかり、雪のむらきえたる、をさぎの二はしるかたちなり。さきなるは、ちひさくて、右にかへりみ、あとなるは、おほきくて、すぐさまなり。みゝ、はな、め、くち、つめまでそなはれり。さと人はうさぎがたとなんいふ。よか五日ばかりして、やう〳〵消えうせぬ。

○腰かけ松

伊達の大きどに。山あり、國み峠といふ。麓に、ふたへの堀あり。西城戸の太郎がほりたるとなん。このわたりに、腰かけ松といふ松あり。源の義經の軍まつとて、この木にしりかけて、まち給ひし故の名なりと、申し傳ふる、いざいきて見んとて、伴ふ人、ひとり二人していきけり。長は、八尺ばかりして、蟠ひろごりたるは、二十ひろばかりなん有りける。いきかふ人の歌などつけたり。ひとく〳〵歌よめといふ。えよまぬといへば、あながちにこひける。さらば、人々の、きゝやすからん様にこそよまめとて、

やくさしに、腰かけまつさ、來てみれば、

わらくづなくて、のどろたまげつ。
いづれも〳〵、きゝやすき歌かな。何うたも、かくよまんこそ、わらはまほしけれとて、手うちよろこぼひぬ。いとをかしかり。

○すゝり石

すゝり石と、いふ石あり。たひらかなる石のなかに、くぼらなる所ありて、水のたまりたる、旱するときも、ひずとなん。武藏坊が、この石の水に墨すりて、着到をつけたりとぞ。こしかけ松のみんなみ、十町ばかりにあり。

○きつね

關の東の國々には、いなりとて、野狐精を祭らひて、にべさにかたてゐやまふ。狐も、よく、祟をなす。道の奥にゐやまはず。くつねも祟らず。たま〳〵祟れは、人に殺されぬ。信夫にお山のでんぼう、一盃ものり長七、よね澤に右近左近など、千歳のおいくつねあり、されど懼るゝ人なし。右近左近がたふらかさんとや思ひけん。上杉がいへのやつこの、東の都へつかひして、たゞ一人山あひを歸るさに、道にさし出て、なでう遲く歸りつる。かうのとのゝいと腹たち給に、いへに歸らばおかしかうがへられん。これよりとういづちいねと、いふを見れば狐なり。にくきくつねのわざかなとて、刀ぬきてきり殺しつ。名高き狐なれど、化けそこなひけるにぞ。
西の國にも、似たる事あり。因幡國鳥取といふ所に、坂川彦左衛門といふさむらひ有りけり。さゝす打たんとて、鐵砲といふものもたりて、野邊に

いきけり。松原の中より人のいできて、みかりにやといふなり。なりれやつこにて、つらは狐なり。今日は、いへぎみに、暇こうてまかりつ。みかりのおほんともにつかまつらんといふ。あしからず來ぬる。これ持てよとて、鐵砲さしいだせば、承り候ふとて打ちかたげて、後にたちてきつ。とある家の門にいきて、いで奴、雉子のありやなしや見をりてのれとて、うちに入りて、今をかしき物の來なん。なわらひそ。せんやうこそ有れとて居たれば、後れ入りて、彼方こなた見はべれど、鳥の見えずといふ。こうじぬらんといへば、庖厨のはたに尻かけつ。いへ人の敢て笑はず。茶をもりて與へぬれば飲まず。水をこひぬ。こはしのまゝにあたふ。椀のもひに、かゝみうつし見て、驚きまどひて、まりも、もひも、ふり捨てゝにげ出づ。皆さとわらひてたちぬ。次のあしたも、雉子うちに出、小松おしわけいけば、草むらの中より彥左衛門とよぶ。誰とゝへどなりは見えず。さすは可笑かりしとて笑ひつ。かの狐の呼びけるにぞ。

老たる狐の化くるは、古塚狐の詩にも、からは雲鬟に變じ、面は粧に變ず。大なる尾は曳きて、長き紅の裳となすとて、處女に變ずる事をいへり。これは男に化けたれば、化けそこなひけるにや。

○おほうなぎ

とよのさきの國に、千丈が瀧とて、はゞ二十尋、たけ七十二ひろある瀧あり。その下なる川に、岸の崩れ入りて干たるに、むなぎの出でたり。兩の

耳、大なる團扇のもてろひろめきて、蚑行まはれり。初、むなぎとも知らざりければ、近づく人もなし。四五日ばかり有りて、死にたるを見れば鰻なりけり。十三間二尺ありけりとなん。

○おほねこ

中川内膳正が家のこ、兄弟ありけり。丹波の山にいきて、狩りするとて、十匁の鐵炮といふ物もて、犬ひきていきけり。右の岩のはざまを見て、ゑぬのおわたゞしく吠えける。強ておひやれば、岩のはざまより、大なるけだもの飛びいでゝ、犬をつい噬へて行きけり。跡を慕ひていきて見れば、五六町ばかりいきて、日かげの暖なる平在所に犬をなま殺して、翫弄びて有りけり。せうとの云ひける、おなや、虎になん。うてゝいなんといへば、おとうとは、よし。虎なめりとも、いみじと思ふゑぬくはれて、其まゝにや歸るべきとて、肩骨のはづれを打ちたり。たけく、いかきけだものゝ、手おひて、ゑぬをば中よりふつと喰ひきりて、おのれもつい斃れぬ。よく見たりければ、年へたる猫なり。頭より尾の本まで、九尺五寸ありしと、羽倉在満がかたりし。

氷室守　下

漣山人

其夜も十時近く、雪枝は小間使の女に伽されて、晝間の蝶をおのが身の上、はや夢

路をたどれば、勝手の方も靜つて、下女が針仕事の手元覺束なく、只表の書生部屋より讀書の聲のそれも途切れ〳〵に聞ゆるばかり。

姑のお霜は、老人の眼の堅く、此時までも何眠りを思はず、わが居間の火鉢に取り付いて、昨日隣家から借りた舊い新聞の續き物を、前から繰つて讀んで居たが、それにも漸く飽きたと見えて、膝の上の一枚を脇へ滑べらせ、靜かに眼鏡を外づして、手の掌で一寸眼をこすつて、小な欠伸を半分袖の中に埋め、暫時默つて座敷の隅を見結めたが、急に思ひ出した樣に躰を捻つて急須を取り出し、好きな茶を手づから入れて、樂しさうに呑み掛けて居る處へ、靜かに襖を明けて、這入て來た例のお露、(お母樣まだお眼醒めでございますか)ト、云ひさして一寸辭儀をすると、お霜は手に持つた茶碗を下に置いて、(あんまり續き物に身が入て。……次ぎが大分靜かだがもう皆寢かしたのか。)(ハイ……前へ寢かしましてございます。)(もうそんなに晩いかねエ)ト、云ひながら振り返つて床の間の置時計を見て、少しは驚いた樣子で、(はんにもう十時だ。妾も寢ましやう。お前も早う寢たら如何ぢや。)云ひかけて、厠へでも行く心か。立上らうとするに、お露は急いでとめて、(アノお母樣……)ト、後

は口籠る様子の、何か譯ありさうに見えるに、お霜はまた坐り直して、(何です)ト問返した。其語氣の稍々嚴格なのに、此方はまた少し逡巡つたが、漸く思切て、(少々申上たい事が………)(ハア、何だか聞きましやう)(アノ………なんぞ妾に………御氣に入らぬ事がございますか。)ト云へば、お霜は少し驚いた様子で、吾知ず膝を進て、俯視いて居るお露の額際から顔を覗き込みながら、(それは又何故?妙な事を尋ねるではないが。)(サ妾が此様な事を申上げましたら、却て又御機嫌に逆ふかは存ドませんが、申上げずに居りましては、何時迄も苦勞の種故、思切て申上げます。アノお母様、妾の身に暗い事でもございますなら、お氣に適はぬ事でも厶いますなら、何卒打ち明ておつしやつて下さいまし。何卒お隔なくお叱り下さいまし)ト、思ひ切て云ひ放して、後ははや涙、堰きかねて右の袂は玉を欺く二つの眼を隱してしまつた。」此体態にお霜も呆氣に取られて、暫時は言葉も無く、只お露を見つめてのみ居たが、稍あつて、(それはまたねらい推量違ひ、入らぬ心配といふものぢや。妾はなんで隔を置きませうぞ)ト、少しは慰める様な言葉。なるほど左様云はれて見れば、それまでのことで、此方も取り付く島もないが、それ聞いて此儘引下る位ならば、此様

なつかしい、苦しい、嫌な思ひをして、此様な事を云ひ出すには及ばぬ話。實に此事を云ひ出すまでには、幾度か吾と心の中に戰つて、寧そ云はうか……それも心苦しく、云はずに居やうか……それも胸安からず。所詮雨降らねば地の堅まらぬ道理、目前一時の苦艱も、將來幾歳の安心には如かずと、思ひ定めてはまた折け、折けてはまた氣を取り直して、遂に此期に及んだも、此温順しいお露の身に取ては、實に巴板額にも讓らぬ勇氣だ。それを今姑の只の一言で、おめ〳〵尻込みする時は、義盛に捕られた耻辱にも增して、折角云ひ出した甲斐も無いのみか、却て姑の機嫌を損ねて、苦勞に苦勞を重ねる斗りと、流石に吾知らず度胸も据わつて、今は水を背にした覺悟—。お露は淚を呑で首を擡げ、(さうおつしやいますればそれ迄の事で。成程妾の僻味かは存じませぬが、それに致しても御母樣の、以前に變る此頃の御樣子、兎角御機嫌が優れぬ故、何處ぞお惡いのかとお尋ね申しても、さうでは無いと、それさへ菅無い御返事ばかり。是には何ぞ元因が無うては叶はず、もしや妾の身に、御氣に染まぬとでもわつて、それをお厭い遊ばす處から、その樣に御機嫌が惡いのでは無からうかと、心配で〳〵なりませず。何時か一度御意を伺つて寧そ嚴いお叱

りを受けたが益と、考へは致しますものゝ、何も證據のあるでは無し。憖じ申し上げて、尚更お氣に障るも心ならずと、つひ遠慮致して居りましたが。もはや貞夫樣のお歸朝にも間は無いに、何時までも此樣では、妾の心が安まりませず。又貞夫樣がお歸朝あつて、此樣子を御覽遊ばしたら、此も皆御留守中に、妾の御世話が行屆かぬからと、何の樣にお腹立ちか。それを案じましては、妾は實に心配で、夜もろく〳〵眠まれませぬ位。……それに、今日も雪枝さんから聞けば、此間あなた樣が、雪枝さんにおつしやいましたお言葉の中に、妾が……貞夫樣のお歸朝を、嫌がつて居ります樣に、お話し遊ばしたとやら。勿体ない、貞夫樣のお歸朝を、なんで妾が嫌かつて濟みましやう。それもほんの一時の御串戲とは存じましたが、餘の事とは違ひまして、只聞き流しにはならぬお言葉。あまりと云へばお情無い事おつしやいますと、實はお恨み申して居りました）ト、云ひさして、今は堪へ切れず、其儘聲を殺して泣き伏した。」袖に餘る涙に、眞情を現はしたお露の言葉に、最前から段々胸を打たれて居た姑のお霜も、今はたまり兼ね、思はず摺り寄てお露の肩に手を掛けながら、（お露、妾が惡かつた許して下さい）ト、佗るにお露は忙てゝ押し止め、

アレお母様、さうおつしやいましては……）（イヤ妾が眞實惡かつた。その美しい潔白なお前とも知らず、妾の邪けた心から、彼是疑ふたは吾ながら淺ましい根性、今更お前に合はす顏が無い）ト、云ふ中、やがてこれも淚聲、急いで鼻を打ちかみながら、（もう何も云ふまい。云ふだけ恥かしくてならぬ故、もう何事も云ひますまい。お前の今の言葉で、もうすつぱり心が晴れた程に、入らぬ心配は廢止にして下され。妾も此からは、夢にもあの樣な邪推はせまいから、何卒勘忍して、今迄通り優しくして下され）ト云へば、お露も漸く笑みを浮べて、（それはおつしやるまでもございませぬ。お心さへ晴れましたら、此樣な嬉しいとはございませぬ。それにつけても……嫌な事を申し上げて、若し御氣に障りましたなら、何卒お許しあそばして）ト、云ひながらお霜を見上げた。其眼の中に、まだ淚は干かぬながら、其儘嬉し淚にして、云ふに云はれぬ邪氣無さに、お霜は其手をぢつと握つて、これほど優しい嫁をば、ようもあの樣に疑はれたものよと、思へば吾ながら恐ろしくまた恥かしく、其儘地にも入り度い心。しぐれも晴れて、さし込むは眞如の月、お互の腹の隅々まで照らして、今は疑心の暗鬼の居處もあるまい。

案ずるよりは產むが安い譬へ、云はうか云ふまいかと、逡巡らつて居た間は、どんなに苦しく、どんなにせつなく、そしてまた何の樣な事に及ばうかと、心に十分の恐懼を抱いて居たが。さて思ひ切て云ひ出して見れば、苦しいもせつないもほんの一時。彼方の疑念も晴れゝば、此方の心配も解けて、一家の親密は是より頓に一歩を進めて、後は漆も膠も眞似のならぬ間柄。やがて貞夫の無事の歸朝に、余所の知らぬ春ははや此家に滿ちて、何事もむかし語り。只めでたいな〳〵。

（完）

文林

寒松　東久世通禧

かくてこそ操なりけれもみぢばの
散りし尾上の松のむら立

鶴拂霜　黑田清綱

うちはふく音こそさゆれわしたづの
子をおほひ羽に霜やおくらん

高山正之大人の墳墓にて　佐々豐水

糸くるま久留米の市の賤の女も
なきて武をの物がたりせり

えんなるもの　井上頼文

さやかにも月すむよ半にたをやめの
夜よしと歌ふ聲きこゆなり

女鑑をよみて　木村啓

明らけき鏡と人も仰ぐらむ
うつす言葉のくもりあらねば

天長節　有住齊

かけまくもかしこき、大きみの御あれの日とて、いはひはじめしは、はやく續紀にみえて、四方の民草か「しら玉しつくや、眞しら玉しつくや」と、うたひはやしつるも、うべなりけり。されどその後絶に絶たるを、今の大みよにふりおこし給ひて、九重のみかきはさらなり。いさなとる賤か家ゐまでも、日のみはたかゝやかせて、おしとんど、としとんどゝ、宴しゑらきさわそぶ聲、大空にとゞろくばかりなり。數ならぬおのがどち、いひはかりて、鏡もちひ、例のごと、神くらにおきすゑて、上に菊の白と赤と二もとを、みちのくに紙につゝみ、右左に瓶子に、白酒黒酒をもりさゝげ、うからやからひざまづき、をろがみつゝ、嘉辰令月と、古めきたるから歌を口すさび、やがてあげまきどもをよびつどへて、君か代のさうかせしめ、菊の花くわしをわかちとらせ、よろこびうれしむさまを、になきたのしびとして、鼻のあたり、をごめく心ちせしを、似つかはしとて、はむるものやあらん。老しれたりと、笑ふ人やあらん。

天長節歌の解と云ものありときけとも、いまだ見しことなし。後日唱歌いあらたむべし。

すまの友　(承前)　何たに子

廿三日　天氣よし。須磨病院長の鶴崎氏と、家主

の野田氏をとひ、かへりに三の谷のあつめ塚をみる。(俗に此塚をあつもり塚といふ) 此塚は平家の人々の首をあつめて、熊谷直實主の葬りしより、此名ありといふ。五輪の塔にて、半ば土にうつもれ、苔生茂りていかにもふるくみえたり。こゝにあつもり蕎麥とて、名物のそばやあり。いときたなく見ゆれども、これも旅の興ならめと、立よりたれども、こゝにてものするこゝちせねば、あらんかぎり求てかへり、直ちにつゆをてうじてこゝろみるに、粉のふるひあしきにや。チャリ〳〵と砂のさはりて心わろく、たがひにわろくいひながら、思ひのはかおほくたうべたり。

廿四日　天氣よし。

廿五日　けふもよし。此はどよりたのみ心かけしよき家を見付ければ、やがて取ちらしある荷をかたつけて。その家にうつりぬ。此家は、海邊にて風入もよく、みはらしもことによし。右には淡路島、むかひにはきの國の由良のみなと、後にははちぶせ、てつかひが峰あり。須磨の名所をわがものになしたるたのしさは、ねるまさへをしきこゝろのせられて、

さまの〴〵むしのね高く月さえて
心すゞしきすまの海邊や

廿六日　天氣よし。

廿七日　晝のほどはあつかりしが、よに入ては涼しくなりぬ。

高殿のをすかゝぐれば月影に
すまやあわぢのはてまでも見ゆ

しほみちて月影きよきすまの浦
　舟にのりてもみまほしきかな

さはおぼさずやといへば、いとやすきことなり。いざゆかんと、あるじの君さきにたちて舟に乘たまふ。心なき舟子らまでも。月はめづらん。いとたのしげに、魚つるものなどとり出して、エヽ和や魚つりナハレと、かひ〳〵しくゑさまでもつけてわらはにわたせり。今まで一度もつりしことのなければ、むだとはおもひながら、愛相ぶりてするを、むげにいなむも心なきわざなれば、糸をもちながらそこらなかめ居たるに、糸をひくことしきりなれバ、こわ〳〵たぐりみるに、三尺あまりもあらんとおもふ太刀の魚かゝれり。舟の中にてヒチ〳〵はねまはりたれば、つりはつりつるものゝ、餘にいきほひつよくて、みなこまりはてたりしもへば、人なみよりすくれて大なる男てありながら、船頭どうかしてくれと、もてあましたるおもゝちいとおかし。

　すまの浦月みがてらに舟出して
　　きらめく魚をつり得たるかな
　舟子どもからろはやこげさやかなる
　　月にあかしの浦つたひせん

（未完）

養老の瀧

高等師範學校三年生　安藤こう

養老の瀧ハ、美濃國多藝郡の西南に當れる白石村の奥の山中にあり。その山は、田跡山とて昔より名だかく、山脈もあまた連れるが、此瀧ある故に

や。そのわたりを養老山とよぶもの多し。大垣より西南二里半ばかりに高田といふまちあり。其處より拾丁あまり山ざまに入れば白石村につく。猶坂路二三丁歩めば養老公園なり。いりくちはやゝ市街の様なせど、行き行くまに〳〵目なれぬ草木、あやしき岩などこゝかしこに立ちて、山のたゝずまひも世の常ならず、水の音なひいとこゝちよし。道の兩側には櫻樹をあまたうゑたれば、春は一しほとおもひやらる。瀧の下水を左に瞰おろし、山路をのぼり行程に、瀧のひゞきいよ〳〵近くきこゆれば、心漸〻急がれて、道の嶮しさも打忘られ、足のすゝみおのづから健なり。いたりつきて見るに、瀧の前の平なる處に小家などありて、瀧にうたるゝ人に浴衣をかす。たきつぼには、高さ八尺あまりの岩兩方に立てり。その上に大なる標繩張りたり。つぼの廣さは五六間四方とおもはる。それに入れば瀧のしぶき面をおそひ、夏の日も寒さはだへにしみ渡りて、手足もふるふばかりなり。瀧の高さは九丈あまり幅は九尺ばかり、たぎち落る下は、一枚の岩にていと堅ければ、水の勢はいと猛けれど、底深くは鑿たで、わづかに人の膝隱るゝばかりにて、其の許に行き易し。わたりはすべて絶壁なるに、舊りたる楓の枝葉茂れるがおほひたれば、秋の景色は如何ばかりかよからんと人々語りあへり。然れど青葉色濃き此頃も、また一しほの見どころと覺えたり。右の方より瀧の源に行く道あり。最嶮し。泉ところ〴〵よりあまた湧出で、瀧の上に流れ集なり。源を窮めて山の奥に

到れバ平なる土地にて、人馬常に行きかひたり。水いと清ければ、飲む者浴むる者など、諸の病を癒すと、處の人々言ひあへり。さて此の瀧の事は、謠或は寺の縁起などにいろ〳〵書きなしたるものあれど、信けがたき事ども多ければ、是等はしバらく舍きて、眞とおぼしき事柄の大凡をいはむ。今より千百七十五年のむかし、元正天皇の御代に、この山中に樵夫ありけり。その父酒を嗜めども、身貧しかりければ飲ましむることも心にまかせず、日々この山に通ひ來て、たきゞを取りて市に賣り、そのしろにて酒を買ひて父に進め、その喜を見るを上なき樂としたりき。或日常の如く山に入てきこりけるをり、ふと蹊みあやまりて深き渓にまろび落ちけり。さるに、その邊えならず馨しき香のしけるを、怪みて尋ね行けば、泉の湧くにぞありける。その水を掬ひ上げて味ひければ、まことに善き酒なりけり。喜び勇みて急ぎ汲み歸りて、父に進めけるに、常よりもうまげに飲みければ、喜しくて日々汲みとりて進めけり。やがてこのよし司にもまをし出でければ、流に泝りて山中をさぐるに、瀧一つ見出しけり。世にも奇しく覺ゆるまゝに、司より直に京都に奏しぬ。天皇この事を聞しめして、靈龜三年九月に行幸まし〳〵て、その水を御手に掬びて御面を洗はせ給ひ、また御痛につけさせ給ひけるに、直に癒えたれば、御感いと深かゝりきとぞ。かくて還幸させ給ひし後、同じき十一月、詔してこの樵夫に位をたまひ、父にはその一生の祿を恤ませ給ひ、猶祿の物

許多賜はりて、その孝行を天下に示したまひ、そのうへ此はまことに大瑞なればとて、年號をさへ養老と改めさせて、天下に大赦せさせ、八十歳以上の老人には位一階づゝ賜ひ、又多藝郡の司にも位一階を昇らせ給ひ、又その郡來年の調庸をはぶかせ、また百官に祿の物を賜はせけり。その時よりぞ養老の瀧とはよびはじめぬる。さてこの　天皇翌年再び行幸せさせたまひけり。それより二十二年をへて、　聖武天皇も天平十二年一月此の地に行幸ましゝけりとぞ、あはれかゝる人跡稀なる山里にも、御代を重ねて行幸せさせ給ひけるは、偏に孝德を重きものにおもほしめしゝ大御心にて、かしこしともかしこしや。瀧より五六丁下れば、左の方なる小高き處に養老神社あり。天滿宮を祀る。菊水天神とまをす。境內に菊水といふ泉あり。社のかたへの岩間より湧き出づ。あたりいと涼し。水をば石を疊みてたゝへたり。底最淺し。山下に流れ行くめり。芭蕉翁この菊水を「掬ぶより、まづ齒にひゞく、淸水かな」と詠みけるれ、この水のいと冷なるをめでたりしなるべし。神社より道をへだてゝ素心庵といふがあり。この主とて尼一人最風雅に住みなしたり。庭の噴水ともおもしろく、凡べて世に似ず淸らなれば、とひ來て憩ふ人多し。神社よりやゝ下れば菊水樓といふがあり。菊水を汲みて浴湯を沸かす。此處より二丁ばかり下ざまに、小高き丘にいと廣やかにかまへたる家あり。千歳樓といふ。養老山の末ひらけざりし明和の頃、岡本喜十郎といひし人の建た

りし者なり。尾張三河の山々より、南は伊勢の海まで一目に見渡されて、眺望いとよし。昔此處にて瀧の流を汲みて湯を沸したりしゆかりにて、今もなほ湯の山といふ。樓より東南のかた二丁ばかり下に養老寺あり。瀧壽山元正院といふ。昔しは天台宗にて、不動佛を安置せしかど、後眞言宗となりて、別堂に移し祀れり。白石村に字行在所といふ處あり。昔行幸せさせ給ひし時の跡ならむ。今は其處に神社ありて、多藝の行宮神社とまをす。元正天皇を奉祀れり。七月二十五日の例祭にて、里人神輿をむかへ、行幸の時の状を爲すといふ。木曾川の支流の谷川をさかのぼりて、鷲の巣といふところより、山路をこえて此瀧に行く道あり。前の道とは表裏になれり。瀧をゆかりに養老酒菊水酒、孝子あめ、玉霰、垣衣石などいふは、この地の名ある産物なり。養老の瀧のゆゑよしは、かく著けれど、むかしは訪ひ行く人もいとまれなりしに、今は夏の日には一日に千人あまりも寄りつどふとか。

雜報

●皇后宮陛下の御仁德　天皇陛下の御事は申し奉るにも及ばず。皇后宮陛下の、同じ大御心に御仁德ましまして、古の聖の御代の例にも、遠くすぐれさせ給へるは、我が大八洲の民は更にも言は

ず、遠き國々の者等さへ、夙に仰ぎ奉れる所なり。されば、此度愛知岐阜の大震災につきては、殊に御心を痛めさせ給ひ、この報知の宮中に達したりし始、即十月三十日、 天皇陛下御諸共に、御救助として、取あへず金三千圓宛を賜ひたり。さるに罹災の慘狀追々御耳に入るに随ひ、彌ますく\憫然に思し召され、その翌三十日にハ、重ねて一萬圓づゝをめぐませ給ひたり。この厚き御沙汰を蒙りて、名古屋にては、知事以下の者ども、聖恩の優渥なるに感泣し、その趣を所々に掲示し、奮ひ勵みて事を處したりとぞ。

かくて思し召しを以て、赤十字社及び東京慈惠醫院等より醫員看護婦十數名を派して、負傷者の救療看護に當らしめ給ひ、侍臣を遣して實況を視察せしめ給ふなど、御心を勞せさせ給ふこと一方ならざりき。

さて又去月十二日、鹿鳴舘に於て、震災救助の爲、婦人慈善會の催あるを聞し召され、直に香川皇后宮太夫をして、御本懐に思し召さるゝ由の令旨を傳へさせ給ひたり。かゝる畏き思し召しに因りて、各親王殿下の御息所、並に宮内省官吏は、相競ひて物品を購ひ求めたるを以て、同會は六千圓餘の金を得、之を震災地患者の治療費に充つることをねたりとぞ。

又當時府下各所に於て、貴賤上下の區別なく、或は演説に、或は幻燈に、或は演劇音樂等に、種々救恤會の催ありしを、宮内大臣より 兩陛下に上奏せられしに、國民が慈善心の厚きを深くめで

させ給ひ、　玉顔殊に麗しくて、いと有りがたき大御言をさへ下し給ひし由承りぬ。

又さきに御手元より、少からぬ金員御下賜あらせられしにも、猶あかずや思はしけむ。日にそへて寒さも増せバとて、いたく震災地細民のうへをあはれに思し召され、慈恵會員の各貴婦人方へ、衣服調度いたし、該地細民に送るべしとの仰にて、各夫人方にも、　皇后宮のかく迄御心を注がせ給へるを感佩し、奮ひて衣服の裁縫に鞅掌せられたる由なりき。

又ある醫士が、徒弟を率ゐ、自費を以て該地に出張し、負傷者の救療に盡力したりし由聞し召し、奇特の事に思し召され、醫士の歸京したる時、直に　皇后宮大夫に令旨を傳へて、御前近く召し寄せさせ給ひ、親しくその模様ども御尋ねあらせられたりとも承りぬ。

又事は少くかはりぬれど、去月五日、芝慈恵醫院に行啓せさせ給ひし時の御事なり。高木醫院長の御案内にて、各病室を巡らせ給ひ、一々病者の容体を尋ねさせられ、小兒には御菓子、御弄物など下し賜はりて、一先御休息所に歸らせ給ひし時、醫院長より、伊藤海軍大尉の、腹膜膨脹炎にて入院し居る旨啓したるに、　陛下には、さらバとて直に病室に臨ませられ、大尉の枕邊に立たせて、懇に病狀を尋ねさせ給ひし上、折角大切に療養せよとのいと厚き御言葉を賜はりしに、大尉はひたすら感涙に咽ひつゝ、顔をもえ上げざりきとぞ。偖その御歸さには、芝の離宮に成らせられ、供奉の

方々に、御陪食仰せつけられ、御手づから御盃を下し給ひ、種々の御話どもわらせられし末、長崎秘書官を御傍近く召させられ、今度愛知岐阜の震災は、實に尋常ならぬ事の由、松方總理より聞き取りしが、聞けば聞く程慘狀の甚しきを覺ゆるは、何とも痛ましき極なりと仰られければ、秘書官には、災害地の人民に於ては、厚き御恵の露にうるほひて、不幸の中にも喜びの眉を開き居る由承り侍りぬと啓したるに、何とも御言葉ば出ださせ給はで、只愁はしき御有樣に見えさせ給ひし趣なりき。

この外にも猶多かめれど、かく書し奉るにすら、記者は、底ひなき御恵の、身にしみ渡り、胸塞がり、眼うるほひて、自ら溢り行く筆の穂の、心に任せぬを如何にせむ。あはれ、かゝる御恵の露にい、傷わるるは痛さをも忘れたるべく、病わるゝ苦しさをも安めたるべし。さては父母妻子を失ひけむ者共にも、再父母妻子に遇へる心地のしたりしなるべし。世の女等に告げまゐらす。美衣玉食輕佻浮薄の女等に告げまゐらす。一天萬乘の大君の　御嫡妃と坐す　皇后宮陛下の御仁德の、かく迄深くかくまで厚く坐しますを、永く心に記憶おかれむことを、

●婦人の義捐　此度の震災につきては、婦人の義捐金を出す者もいと多かり。上は貴夫人令孃より始めて、下は藝妓娼婦に至る迄、其の名は毎日の新聞紙上を埋めたり。其の慈恵の心に留めるは誠に嘉すべし。されど中には、已が名の新紙上に

載せらるゝにめでゝ爲したる者あり。我が名びろめとしての、廣告の代りにしたる者も多かりとか。一は名譽の爲にする者なり。一は利益の爲にする者なり。名と利の爲に義を裝ふ人等の、まこと慈惠の心より出でし人等と、一つ列に其の名を並ぶるは、實に玉と石との、混ぜられたらむ心地のせらるゝよ。

●議會は開けぬ　傍聽には如何にと誘ふ。何時と問へば、豫算案の提出せらるべき時にと答ふ。それいと面白からむといへば、劵ハ妾が引き受けたりといふ。是に於いてか議會傍聽の契約調ふ。是はこれ當世女壯士の政事談。

●人は盡夫なり　天下の婦女子は皆吾が妻なりと、男子が英雄を氣取れるからは、我も亦、人は盡夫なりとて女丈夫を裝ひなむ。英雄は色を好むといはゞ、天下一人の異む者無く、而して女子の節を破るをこれ咎む。偏頗の沙汰にハ非るか。彼既に一婦を畜ふるに甘んせず、我焉でか一夫に安んずることを得べき。故に曰はく。人は盡く夫なりと。是に於いてか婦人處世の標準定まる。是はこれ當世女書生の修身談。

●男も人なり女も人なり　故に女は男なり。男子に天賦の權利あれば、女子にも亦同樣の者有らむ。男子が自由の貴ぶべきを知れバ、女子も亦同じく之を認む。茲に知る。男女同權の天理なるを、如何ぞ久しく男子の下に服從すべき。何となれば同じくこれ人なればなりと。是に於いてか論理學の應用成る。是はこれ當世女學者の哲理談。

●年將に暮れんとす　追羽子に日を暮らし、歌がるたに夜を明かしぬる一月の樂みは、まだしも昨日今日の心なるべし。過ぎ行く月日は、隙ゆく駒も物かはと覺ゆるばかり、春去り秋來りて、今年の殘りは、はや月もて數ふべからざるに至れり。さるにても、女等が成し出で給へりし業は何事ぞ。數卷の書物、數篇の歌文、讀みもし書きもし給ひしなるべし。裁ち縫ひけん衣服幾枚、織りなしけむ布帛幾匹、何の事くれのわざ、數へなば種類こそ多からめ。借問す。此等の外に、心を正し行を直くすべき德義の涵養は、如何なる所に迄その歩を進め給へるか。

●編者まをす　小說氷室守の插畫は、得去り難き都合の侍りしにより、今回限り掲載を見合せぬ。次號には必埋め合せして、讀者諸君の御心を滿足せ申すべし。幸にこの意を得たまひてよ。

●又まをす　女鑑の主義贊成の諸君より、寄せられたる文章歌詩は、机上に堆くなりぬ。悉く載せんとは思へど、限りある紙數にはすべも無ければ、次を追ひつゝ出し申さむ。心惡しうな思しそよ。

●義勇壯烈譚林　本書は、大河原献芹氏が、織豐以來の忠臣義士名將悍卒等の言行を拔き記されたるものなり。而して文章のかまへいと平易なれば、婦女幼童にも讀み易く解き易し。發行所は東京麴町區飯田町二丁目四十番地の昌文堂。定價は一冊金十二錢。

餘芳

星月夜物語

鎌倉のわびすまひ

愛馨散史

鎌倉の町のはしなる、寧田舍ともいふべきところに、華美にはあらねど、さすがに嚴しき住家あり。主人は如何なる人にか。高貴の方の世を避け給ふにやと思へど、垣の所々は崩れかゝりたるなどあれば、あらぬなめり。荒々しき武士にやと見れば、門守る人のかど〳〵しきには似で、折ふし出入するものゝ大方は、艶麗優美なる女房なり。兎まれ經歷ある人の住家にてこそ。

これなむ左衛門局とて、源左近衛權中將に仕へ奉りて時めき給ひてし人の、末葉のやどりなりける。父は佐々木左衛門守信守とて、才智賢き人なりけるが、去にし年寃罪にて死せにき。母は、局に顔をも知らせずて、死去りけり。かゝるわびしれたる身ながら、容姿は世になく淸らにして、衣通姫に朝な夕な仕へ奉りて目馴れけむものも、この人には猶驚きぬべく、心はたいと素直なり。由緣ありて權中將に仕へ

奉りしより、御いきはひは、旭の登るが如く、わたりまばゆく見えたり。源氏物語なる桐壺更衣の御有様も、かくありけんかしとぞ思はるゝ。然れど、貶しめ疵をもとむる人もなく、はしたゝめわづらはす方もなし。稀なる幸福人と天の下のもてはやし種になんありける。權中將卒急に桂ケ谷なる修禪寺に下り給ひしより、世の中とみに據なき條ありて、味氣なくなりまかり、この住家に遷されけるなり。昨日までは、唯春の花秋の月にのみ心を動し、憂きふしげしき世に、憂をも知らで過し給ひてし御身の、いかに常なき世とはいへ、蕣の露はす日影にあひたる如く、今日はしはたれがちに、消日させ給ふ身とはならせ給ひけり。月や昔の月ならぬ。花や昔の花ならぬ。その身ひとつのうつろひ傾けるにつけて、今は憂の種となりはてつ。侍べる者とては、幼き頃より召し使ひ給へりし、清野といへる女房ばかり。外は皆警固のためにとて、附けおかれたる武士なり。

今日しも、大政所よりの使とて松殿侍從來り、時をうつして皈りけり。見送る局、いと物思はしげに頭をたれ居り、見かへる侍從、笑ふと見えしは僻眼なりしか。こ

もいと物思はしげにて、涙も落ちぬべく見えたり。

皈る間遅しと、清野は問ひかけぬ。

松殿侍從は、何その用にて來り給ひしか。御身の上には、善か。惡か。と然れど、局は猶頭をたれ居り。荅ふるものは、唯吐息のみ。

大政所より慰問の使などは、思ひもよせられず。このわびすまひだに、いぶかしと世につぶやかるゝ主。罪告げ知らす上使にはあらじ。さりとて豫ねてより、心わひ給へりとしも知らざりし侍從の、よも私の訪には。主のいと物思はしげなるは、必樣こそありけるなめれ。強ひて問はんか。御心に背悖りもやむ。問はで止みなんか。主の身の上いと覺束なし。他人の心を、たしかに謀り知らん術もがな。

など千々に思ひ惑ひたれど、忠實なる心には、さて止むべきにもあらず。つゝしみも時こそあれ。よしや御心に背悖りて、窘責められむも何のものかは。と強ひて問ひぬ。然れど荅は、猶吐息なり。いはんすべ爲むすべ不知極りて、いとはしたなき樣にて、そこをすべりいでけり。

襖はたてたれど、去らむともせず、坐りもせず。是もまた頭をうなだれたり。
噫妾ながらおぞましかりし。主の心は、妾よく知りぬ。百千度問ひかへしたりとて、主は妾を窘責め給はド。再び御前に出でゝ問ひ試むか。異事ある時は、妾に謀り給ひけり。些細の事にても、妾に告け給ひけり。然るに一度ならず、二度三度、問ひても答し給はざりき。主の心は、妾いまだよく知らざりけりな。主は妾を疎み給ひしにか。よも。兎まれ明日つとめて。

など、やう／＼おのれの房に入りたり。

心細き五日は既に山の端に入り。世の中物恐しげなり。忌々しき犬の遠吼に、胸もときめきせらる。

何はさて、いで御前に。胸の思ひの消えなんよしもやあらむ。

と心を定め、そゞろにさわぐ胸おししづめ、静かに局を訪ひたれど、吐息だにいらへせず。

物思ひ居給へるにはあらじ。さりとていね給ひしにもあらド。いかにしたまへるにか。

と襖を明くれば、照りかゞやける燈の、光を遮る者もなし。つと目に入りしは、文よ机の上なる紙の、のこしふみ、といとあざやかにかきつけられたる紙よ。（未完）

○編者謹謝。目次に掲げたりし漫錄の末の白河樂翁公茶室壁書は、印刷の際誤りて取落しぬ。今は術もなければ、之を次號の紙上に載する事とつ。

をしへの庭

十二月兼題

歌題　歳暮述懐

文題　雪見に人をさそふ文

この月の歌題の歌のすぐれたる人々には、拙著新撰歌典をまゐらすへし。

明治廿四年十二月一日　落合直文

山家初冬

山里のかきはあれてこのあした　小池　敏子
霜こそおけれ冬やきぬらむ

さゝ馴しをしかの聲も今日よりは　植木　鋼子
たえてさびしき冬の山里

さゝなれし軒はの松のあらしさへ　師岡賀須子
さむさをそふる冬はきにけり

山風に軒のもみぢはちりはてゝ　落合　操子
梢さびしき冬はきにけり

さゝなれし軒のまつ風音かへて　小川　貞子
しくれをさそふ冬の山里

山里の軒の梢の木の葉さへ
しくるゝ冬になりにけるかな　臼井千代子

峰に生る松のあらしの聲すみて
ふもとの里に冬はきにけり　中野ため子

草木より人めやさきにかれぬらむ
この山里に冬しきぬれは　加納由良子

たきゝこる深山のいはの柴の戸に
今朝霜おきて冬はきにけり　高井孟子

折々は紅葉かりにと來し人も
たえてさびしき冬は來にけり　江崎操子

山里に草かる賤がおふ牛の
いきさへ見えて冬は來にけり

山里の梢まばらにはつしくれ
しくれ〳〵て冬はきにけり　鈴木こう子

山里の友とたのみし鹿の音も
いつしかかれて冬はきにけり　柳原文子

冬きぬとことわりかほに柴の戸を
たゝくは夜半の木からしの風　篠原芳子

山里の軒ばさひしくかしの實の
ひとつこほれて冬はきにけり　松野雪子

山里のかけひの水のけふりにも
さむさおほえて冬はきにけり　清水琴子

世の塵にそまぬみ山のもみち葉も
おとなくちりて冬はきにけり　青木さん子

山里の軒ばの紅葉ちりはてゝ
冬を告ぬる木からしの風　木村美津子

今朝見れば庭の千草も霜かれて
柴の戸さむく冬はきにけり　久保田里津子

庭もせに落葉みだれて山里の
夕ぐれ寒し冬やきぬらむ　西澤靜春子

山ざとは間なく時雨の音づれて
衣手さむく冬はきにけり　大森峯子

ましらなく聲を友なる山里は
落つる木の葉に冬をしりつゝ　西澤美登子

柴の戸のひまもる風も身にしみて
我が山里に冬は來にけり　平塚千代子

木枯に落葉みだるゝ山ざとは
人めも枯れて冬ぞきにける　高田三喜子

山賤が軒に色そふもみぢ葉の　山代　由子
ちりゆく見れば冬やきぬらむ

いつのまに冬やきぬらむ山がつが　阿部須磨子
庭もせにちる木々のもみぢば

山里は木の葉まじりにしぐれして　今井　照子
今日より冬となりにけるかな

木々の葉は風にまかせて山里の　江上加知子
柴の庵に冬はきにけり

鹿のねもいつしかたえて山ざとは　萩原久良子
木がらし寒く冬ぞ來にける

錦とも見てし紅葉はちりはてゝ　佐々有鄰子
山里さむく冬は來にけり

山里の木々の葉末は霜がれて　千々波橘子
たもと寒けく冬は來にけり

山かげの柴のとぼそに初時雨　小出登爲子
おとづれそめて冬ぞ來にける

孝女とせ子の傳　江崎みさ子

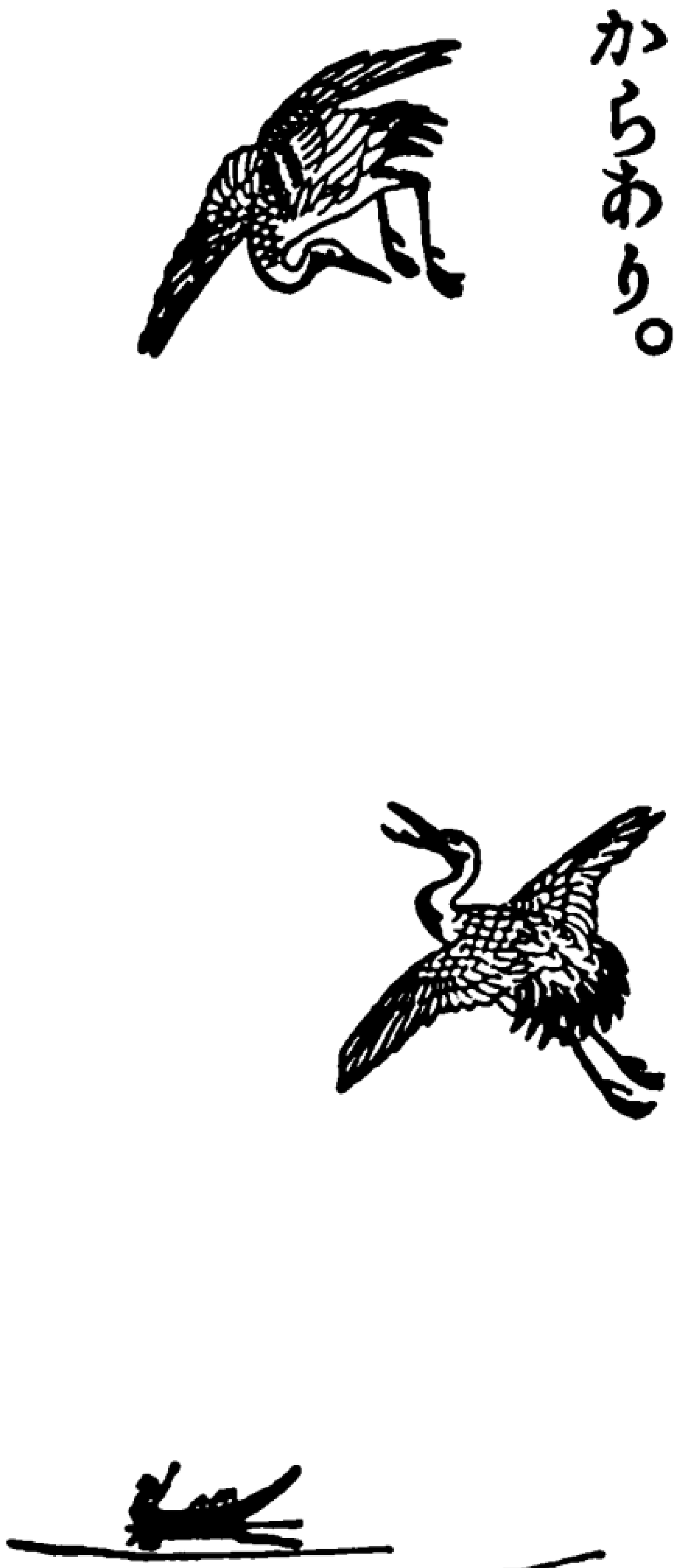
とせは、伊勢國、安濃郡、某村の農、某の女なり。をさなくして、隣村の、某に養はれぬ。其家、いと貧しかりければ、文よみ、字かくわざは、更にもいはず、忠臣孝子の話だに、きゝしこともなかりけり。されど、天性至孝にして、よく養父母に事ふること、古の聖の教に、露たかはさりけり。とせ十餘歳の時、その父らい病といへる病にかゝりぬ。人に知らるゝ事のつゝましさに、いとようもてかくしてかしつきぬ。これよりは、その貧さ一しほにて、かまどの煙も、たえ〳〵にのみなりぬ。とせは、母を助けて、ある時は人に雇はれ、又ある時は、山にわけ入りて、枯枝松葉など拾ひあつめ、市にもちいでゝ、賣りありきぬ。されどいくばくの價も得されば、人のすゝめにしたがひて、同村の某かたに雇はるゝことゝなりたり。かくて給料はさらなり、めづらしきものなど、主人より得れば、こと〴〵く父母の許におくりぬ。かゝる孝女の心つくしを、神はあはれと見給はぬにや。母亦、おなし病にかゝりぬ。この病にかゝりしものは、村よりおひやらはるゝ習はしなるに、

今はたれも〳〵、皆知りにたれば、とせはた〻、いか〻はせむとなき惑ひぬ。心なき村人らも、とせの心のいとほしさに、村はつれなる畑中に、小屋たて〻、それに住まはする事となしたり。えもいはれぬ臭氣、家の内にみち、うみしる流る〻など、見るもいまはしきに、人々うとみはて、親しきうからやからすら、更にかへり見ずなりぬ。か〻る中にも、とせは父母を思ふ心、いよ〳〵ふかく、主人に請ひて、よな〳〵小屋に立かへり、藥より、なでさすりまて、身一つにとりまかなひぬ。程ふるま〻に、いよ〳〵重りゆきて、居たちも、心にまかせずなりしかば、とせは、いとまをこひて、家にかへりぬ。ころは冬のも中なりけり。或夕暮、風いみしう吹いて〻、雪さへ打ましりきぬ。とせは病人の、寢ぬるを見て、あはれ寒き年かなと、きえのこる火をかきおこし、柴をりくべむとすれは、いつしかつきぬ。かくては、この夜をいかでわかさむ。いでやねざめ給はぬ程にと、やをら立ちいて〻、向ひの山にわけいりぬ。枯枝、松かさ、さては落葉などかきあつむるに、風はます〳〵ふきいて、雪はます〳〵ふり來ぬ。時の移らは、目覺め給ひて、吾を求め給はむと、家路にむかひしに、風と雪とは、衣をとほして、そのさむさいふばかりなし。さむさはなにかあらむと、猶いそがむとせしに、今朝より、かゆをたにす〻らねは、うゑつかれて、足す〻まず。からうして、里まで出てぬ。折しも、かなたよりきたりしは、其村に、慈善家のきこえ高き某なり。この人常より何くれと、めぐみくれしが、今はしたなく行きあひて、いかにあはれに思ひけむ。おのが着つる、羽織をぬきて、とせに與へて、ゆきすぎぬ。とせは、た〻涙にくれて、しはし後かげをふし拜みぬ。かくて、飛ふがごとくに家にかへれは、両親は猶うまいしたり。いとうれしと思ひて、す〻けたる行燈とりいたし、火なともして、さて爐をかきさくるに、火ははやきえてあともなし。いかにさむくおはせしならむと、ひとりごちつ〻、雪のか〻りし枯枝、三つ四つに、落葉とりそへ、辛うし

てたきつけぬ。やがてかけそこねたる土鍋とりいてゝ、物など煮つゝありしに、父母目ざめぬ。とせはこの物を、先父母にすゝめ、殘りすくなきを、我身はくひぬ。かゝる事は、大かた常の事なり。ある時、實父母とせをよびて、さていふやう、そなたの孝行は、世にはめぬものもなく、われらまで、いたく面目をほどこしたり。今は人の子たる道、はやつきたりとおぼゆ。そなたも、最早年頃になりたれば、早く何れへか嫁くべし。女は盛の時に、おのがよすがを定めされは、世のかぎり不幸に終るものとぞ。かゝる人よりも、またさる人よりも、そなたを望まれたり。共に田地もあり、畑もあり、不足なき人々ぞや。ひたふるに、養父母に孝養を盡さむとて、其身の一生を誤るは、智なきわざにあらずや。今よりは、人なみ〳〵の衣裳をも着、樂をもせよかし。今のごとくにては、われらも心をやすむることかなはず。養父母のみが、親にもあらさるべし。われらの心をやすむるも、又孝行ならずやと、言葉をつくしてすゝめたり。とせは涙ながらに、生の御恩ふかき、御兩親さまに、露ほどの報いたにせぬ、不孝の身をもすて給はず、あはれみ給ふその御志、いづれの世にかわすれはへらむ。生の親と、養ひの親と、我身におきて、えらふ事はつゆ侍らねど、御子もあまたおはしまし、衣食も足りて、おはしますれは、我身なくとも、事かき給ふことはあらさるへし。養父母はわなみをおきては、他に子といふもの一人もなく、今はたかゝる病にかゝり給ひしかは、我身を、杖とも、柱とも頼み給ひ、片時もなくては、えすごし給はず。されは、我身は、よき衣裳、着まほしとも思はす。甘きもの食はむとも、思はず。まして、嫁かむことは、夢にも思ひかけ侍らず。たゞかくて、父母の御もとにさふらふこそ、中〳〵にうれしけれ。わなみをあはれとおぼしなば、このまゝになしおき給へかしと、あとは涙にかきくれぬ。その志、動かすべうもあらざれは、父母もきこえわつらひて、そのまゝに捨ておきたり。かくて、春も過ぎ、夏もくれぬ。ある夕暮、

養父母とせを枕邊ちかくよひて、其志のうれしきよしなと、さま〳〵かたらひて、さてなに事ならむ、用事をいひつけて、いたしやりぬ。夕月夜のをかしきに、草葉の露いとしけく、虫のこゑ〳〵なきすさふなと、いと〻あはれをそへにけり。やがて、事はて〻、更けぬ程にといそきかへりぬ。戸の外より音なひ入れと、更にいらへなし。こはいかにと入りて見れは、両親ともにかけもなし。聲をかきりにうち呼ひて、そのわたりもとむれと更に見えず。よもすがら求めわびて、津のかたに出てぬ。道ゆく人に、か〻る人に逢ひ給はずやと、問ひつ〻行くに、ある人、某所にて見きといふ。いとうれしくて、足をそらに走り行けは、猶やすらひて居たり。涙なからに、など一人のみはすておき給へるといへは、熊野詣を、思ひ立ちしかと、御身を苦しめむ事の、心し苦さにといふ。とせは、そはよき事にこそ。御ともつかまつらむとて、二人の病者を、いたはり助けて熊野街道にむかふ。山路いとさかしければ、一人負ひては、二三丁のぼり、又下りては、一人を負ひのぼり、かくしつ〻、あまたの峠をこえぬ。こを見る人々、皆あはれといはぬものなし。月日重ねて、村に立ちかへりぬ。時の藩主、藤堂公、その孝を賞し給ひて、黄金百金を下し賜ふ。かくて両親は天命を以て、終り、其身は一生やもめにて終へたりといふ。あはれとせは、目に一文字をだに知らざる、一賤女なり。さるに猶かくのことし。世の令嬢と、たふとまれ、目もあやに、着かさりて、學校にいて入りし給ふ、君たち、心にはぢ給ふところはおはせすやいかに。

直文評さまて力を用ゐ給ひしところは見えねと、筆のはこひおたやかに、よくかきつくされたり。ことに結末のところいふへからさるちからあり。



漢文學講義録

掲載課目

大學	……	三島中洲
文章軌範	……	土屋鳳洲
莊子	……	大野雲潭
史記	……	石川鴻齋
日本外史論文	……	池田蘆洲
十八史略完結	……	山田濟齋
孫子完結	……	内藤耻叟
日本政記論文	……	生駒膽山
文話	……	岡三慶
論語	……	本城鷗峯
唐宋八家文	……	五十川訒堂
詩話完結	……	石橋雲來
詩經	……	山田濟齋
名家文解	……	久保檜谷
管子	……	藤澤南岳

右講義録ニ就テノ御問合セハ直ニ本社ヘ御通知ヲ乞

發行所　益友社
東京麹町區富士見町一丁目三十四番地

(大八洲學校講義録)

(第壹號)

○國史

神皇正統記	久米幹文
近古史	小中村義象

○國文

近世史	萩野由之
土佐日記	小中村義象
徒然草	小杉榲邨

○國典

文典	落合直文
古今集	本居豊穎
皇室典範	増田子信

○附録

歌道の沿革	小中村清矩
文かたり	久米幹文

第二號第三號既ニ發兌

校外生ハ何時ニテモ入學ヲ許ス規則書望ミノ者ハ直ニ送附ス但郵券二錢添ヘ申込ヲ要ス

本郷元町一丁目六番地
大八洲學校事務所

おのれが實母高濱藻瑳子ことし八十のよはひをむかへたり親族家族うちつどひて賀宴をひらかんとす世のひめとねたち寄名所祝と題して歌に文におくり玉はゞ老母がよろこび是にすぎじとこひ奉になんあなかしこ

熊本縣肥後國菊池郡城北村大字木野
佐々豊水

國光第三卷第四號

目　錄

定價壹冊金貳拾錢
郵税金貳錢

（遞信省認可）

女鑑第四號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麴町郵便局へ御振込可被下事○郵便劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し強て領收證を要せらるゝ方ハ別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書ハ一切受取不申候事

女鑑

毎月一回五日發行

定價壹冊金拾錢
半ヶ年前金五拾五錢
壹ヶ年前金壹圓
全國無遞送料
廣告料 五號文字廿三字詰
一行拾錢

明治廿四年十二月五日印刷
同 年同 月五日出版

東京麴町區平川町五丁目十六番地
發行兼出版人 西澤之助
同
印刷人 長屋基彥
同
發行所 國光社